琉球大学学術リポジトリ

第6回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学
	公開日: 2015-03-18
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 琉球大学附属図書館編
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/30534

2012年度
琉球大学

琉球大学附属図書館報「びぶりお」特別号

第6回 琉球大学びぶりお文学賞 受賞作品集

琉球大学

歪んだかざぐるま ── 知念 紘己

マットの泉 ── 東恩納 るり

受賞作品集
2012

小説部門

レインボー ── 上間 美香

第6回 琉球大学びぶりお文学賞

かいわ ── こはぐら

雨 ── 長島 瑠

ティクターリクの夢 ── 添田 晴日

チニカエレヨ ── 蓬田 匡

詩部門

プロテウス ── 東恩納 るり

第六回琉球大学びぶりお文学賞作品集

第六回琉球大学びぶりお文学賞受賞作品集　目次

小説部門受賞作
レインボー　上間　美香　6
（法文学部・国際言語文化学科四年次）

小説部門佳作
歪んだかざぐるま　知念　紘己　34
（法文学部・総合社会システム学科二年次）
マットの泉　東恩納るり　66
（法文学部・国際言語文化学科四年次）

詩部門受賞作
プロテウス　東恩納るり　102
（法文学部・国際言語文化学科四年次）

詩部門佳作
かいわ　こはぐら（教育学研究科・修士二年次）106
ティクターリクの夢　添田晴日（理工学研究科・修士二年次）111
雨　長島瑠（教育学部・学校教育教員養成課程四年次）114
チニカエレヨ　蓬田匡（理学部・海洋自然科学科三年次）116

選評
小説部門選評 122
詩部門選評 134
選考経過 139

琉球大学びぶりお文学賞は、琉球大学が基本目標として掲げる「地域及び広く社会に貢献する人材」「意欲と自己実現力を有する人材」育成の一環として、言語力（読む力、書く力）を向上させ、想像力、表現力、創造力豊かな学生を育成するとともに、文学の啓蒙活動を高め、地域社会における文学・文化活動のリーダーを輩出することを目的に琉球大学に在学する学生を対象に平成十九年度に設けられました。

装丁　上村　豊

小說部門

小説部門受賞作

レインボー

上間　美香

「ワン！」

耳をつんざくような甲高い声で、僕は目覚めた。かと思うと、奴は今度はベッドの上に飛び乗り、僕の顔をペロペロなめ始めた。

「おい、モチ。やめろって」

袖で顔を拭きながら言った。

まだ眠いので、頭も回らず、されるがままになっていたが、奴はしばらくすると飽きたのか、何処かへ行ってしまった。

柴犬のモチ。まだ寝足りないのに起こしやがって。

開かれた窓の外は既に明るく、朝靄に包まれた壮大な山々が広がっていた。部屋のなかは心なしか、ひんやりとしている。夏の盛りの八月だが、朝は涼しい。でも、どうせ太陽が高くなるに

つれて、あの暑さが戻って来るに違いない。
ハワイ三日目の朝。
「また一日が始まる」
溜息をつきながらつぶやく。
ネットでたまたま見つけたホームステイプログラム。大学の寮がオープンするまでの一週間、住む場所もないし、家庭に入れば、英語の上達も早いだろう。そう思って応募した。まだ見ぬ誰かとの生活。少し緊張したが、あまり深く考えずに、リストへの登録ボタンをクリックした。
それが、そもそもの間違いだった。僕はもうこのベッドの上から、どうしても起き上がりたくないのだ。ベッドを離れれば、一日が始まることを認めなければならない。
「ワット?」
またしても、耳をつんざくような甲高い声が、家じゅうを支配する。犬が飼い主に似るというのも納得できる。
「ヘイ、今日は休みのはずだろ、やあ?」
出た、「アンティー（おばちゃん）」こと、ホストマザーの声。彼女のヒステリーは、今日もとどまるところを知らない。ますます僕はベッドを離れたくなくなる。
しかし、彼女が電話を切る前に起きておく方が良い気がした。僕は思い切って身体を起こし、顔を洗ってニンジャのよだれを念入りに落とし、髭をそってからリビングに向かう。
「ヤレヤレ、困ったもんだ。分かったよ。今行くから。シーユーレイター」

アンティーは乱暴に受話器を置いた。
「あら、タカ。グッド・モーニング。起きてたのかい。もしかしてあたしの声で起こしちゃったかね。まあ、この年の女はねえ、血圧が上がりやすいんだよ。歳のせいだから」
よく聞く中年女性の言い訳だ。
「今日は、仕事は休みのはずだったんだがね。一人がどうしても出られなくなっちゃったもんだから、今から行かなきゃならんのさ。今日はあんたは行かないだろ。冷蔵庫探ってなんかブレークファスト食べときなさい。あ、スパムむすびが入ってるから。帰りは三時頃になるよ」
そう言うや否や、彼女は、日によく焼けた肌に、ノースリーブと短パンという格好で、玄関に向かう。長い黒髪はゴムでまとめているが、化粧はしてなさそうだ。それでも、庭でとれたプルメリアの花を、左耳に飾るのは忘れない。これから、近くの港にある海の家で、ベントーやらシェーブアイス（かき氷）を販売しに行くのだ。昨日はついていったのだが、退屈だし、暑いので、今日は遠慮しておく。
アンティーはモチにお別れのキッスをして言った。
「あ、モチに餌あげるのも忘れないで」
僕はメイドか。思い描いてたホームステイは、こんなはずじゃなかったのに。
ハワイにやってきた日。アンティーは、僕の空港到着時刻の二時間後に姿を現した。
「アローハー。ハハ、あんたのことすっかり忘れてたよ。おかげで、たっぷり眠って、いい夢見させてもらったよ」

僕は、怒りを通り越して、返す言葉がなかった。この先一週間のことを考えるとぞっとした。そして、家に来てみればこの有様だ。ブレークファストもランチもセルフサービス。おまけに全く片付けができないのだ。

ホームステイ先のホストには、「あたり」と「はずれ」があると、以前留学へ行っていた友達から聞いたことがある。僕のホストは、まさに後者だ。

とりあえず、お腹は空いてるようなので、冷蔵庫を開ける。手前には納豆があった。ここに来ても、ジャパニーズ・フードの代表格は代表格のままだ。二つの缶詰のポークが乗っかったおにぎりは、その奥にあった。スパムむすび。僕は、それらをレンジでチンして食べる。

コバヤシ家。

日系のホストファミリー。ファミリーといっても、アンティー一人だ。昨日の夕飯の時の話によると、日系の夫がいたが、三年前に離婚したという。一人娘とは去年まで一緒に暮らしていたが、今は、修士号を取りに、シカゴの大学に通っているらしい。

そんなことを、物凄く癖のある英語で話していた。何ていうかな、独特のなまり。日本のアクセントが少し混ざったような、いや、あれは中国とか、フィリピンとか、もっと他の発音も混じってる。たまに、英語ではない、よくわからない言葉も出てくるし。

気づかぬうちに、僕はスパムむすびを、ペロッとたいらげていた。むすびが包まれていたラップを、僕はキッチンのゴミ箱、といっても段ボール箱に黒いビニールを敷いただけの簡易なものに放り投げた。そこには、少し臭う使用済みの、犬用トイレシートが入っていた。僕は一瞬吐き

そうになって、目を背けた。
キッチンの隣の部屋を見渡す。積み重なる段ボール、埃のかぶったチラシや雑誌の束、いかにも壊れていそうなラジカセ、破れたクッション、富士山の描かれた折れ曲がったブラインド。改めて見ても、「ゴミ屋敷」だ。大目に見ても、「汚部屋」だ。いつか、テレビの特集で見たそういう類のものにそっくりだ。
キッチンには、昨日食べた夕飯の分の皿が置かれていた。周りを見渡したが、食器洗い機はなさそうだ。アメリカの家には、大抵あると思ってた。仕方がない、洗いますか。僕は、スポンジに洗剤をつけ、たっぷりと泡を立てて洗い始めた。ここまで片付けができない人が身近にいるのは初めてだ。これじゃ、夫に逃げられるのもわかるわな。まあ、本当のところ、なんで離婚したかはわからないけど。僕は、ああだこうだ考えながら、ゆすいだ皿をかごに入れる。やっとで終わった。あとは自然乾燥で間に合うだろう。
僕は溜息をつきながら部屋に戻り、デニムの半ズボンとTシャツに着替えた。そして、リビングに行って、穴が空いて中のスポンジが見えるソファーに腰を下ろし、テレビを点けた。
韓国ドラマ。アンティーがいつも見てるチャンネルだ。韓流はハワイのおばちゃま達の間でも熱いのだ。僕はチャンネルを変える。ペット番組、アメリカンアイドルの再放送、ニュース、センスのないローカルのCM。
どれも面白くなさそうだが、仕方がないので、フットボールの試合で落ち着く。ハワイ大学とウエスト・ヴァージニアの大学との試合。相手チームに比べ、ハワイのチームには、アジア系と

ポリネシア系が圧倒的に多い。日系、中国系の名前も目立つ。なかには東南アジア系なのか、読めない名前も多い。恐らく、ネイティブ・ハワイアンと思われる名前もある。何人かの腕には、幾何学的な模様のタトゥーが入っている。浅黒い肌に、生まれつき持っていたかのように馴染んでいる。ヨーロッパ系の人は、見たところ二人しかいなかった。実に色々な人種がいる。さすが、ハワイ。ユニフォームには、「レインボー」と書かれている。虹のようにカラフルな集団。彼らは激しくぶつかり合い、抜群なチームワークで着実に点をとり、十七対十三で優位に立っていた。僕は、ルールもあまり分からないまま、ボーと画面に見入っていた。

そうだ、モチに餌やるの忘れてた。僕はだらだらとキッチンに向かい、ドッグフードと水を容器に入れる。それにしても、あいつ、どこに行ったんだ。

「モーチ」

呼んでみたが、返事はない。リビングにも……トイレにも……僕の部屋にも居ない。はては、奥の部屋だな。僕はゆっくりと歩いて奥へと進む。進むにつれて、紙が風で仰がれるような音が聞こえてきた。なんだろう。

外では、いつの間に暗雲が垂れこめ、激しい雨が降り始めていた。スコールかもしれない。風が強くなり、紙の摩擦音のようなものは更に大きくなる。

そこは、アンティーの部屋だった。壁に貼られた何十枚もの紙が、窓から入って来る風に、パタパタと音をたてて揺れていた。僕は、足元に落ちている一枚の紙を手に取った。デッサンだった。

僕の中に、眠っていた何かがうずく。鼓動が高鳴った。この家の窓から見える、美しいコオラウ・マウンテン。屏風のように光と影を織りなす山並み。黒い鉛筆で描いているだけなのに、本当にギザギザとしている気がした。

比較的大きな画用紙には、色がついていた。エメラルドグリーンを漂う海亀、咲き乱れる花々、溶岩の流れる火山。サーファーや、漁師の姿、フラを踊る少女達、道端でお喋りする叔母さん達の絵。どれも、リアルな風景だが、線は一本描きで大胆に歪み、ユニークな丸みを帯びている。その上に、淡く、優しい色が、ふんわりと乗っかり、滲み合っていた。透き通っていて、絵の中に吸い込まれていきそうな、そんな描写ばかりだった。

おんぼろの机の上には、ぺちゃんこの水彩絵の具達が転がり、筆は水差しの中に入ったまんまだ。風がふいて、雨の匂いとともに、かつて高校の美術室で匂ったような、懐かしい匂いがした。

あの頃、僕は芸大を目指していた。よく美術室に通っては、絵を描いた。ただの落書きみたいなものから、水彩、油まで。絵を描いている時は、誰にも邪魔されない、自分だけの世界に身を置くことができた。本当は、大好きな絵を描き続けたかった。でも、将来を考えたら、やっぱり厳しかった。芸術家として食べていけるのは、ほんの一握りなのだから。そもそも、世の中では、絵画の需要なんてこれっぽっちもない。絵なんかなくたって、人間生きていけるのだから。実際、本よりも、音楽よりも、日常的には触れる機会が少ない。ぎりぎりまで悩んだ挙句、結局僕は、国立大学で経済学を専攻する道を選んだ。需要と供給のバランスで成り立つ世界。需要曲線と供給曲線の交点こそが、この世の中で一番の安全地帯なのだ。少々後ろ髪は引かれたが、大学に入っ

て以来、もう三年ほど絵を描いていない。一度描いてしまうと、後悔に襲われそうだというのもあった。しかし同時に、一度離れてしまえば、意外にも簡単に忘れてしまえるものでもあった。それでも今、僕の心臓は早鐘を打っている。

そういえば、アンティー、昨日夕食後、皿も洗わずに、背中を掻きながら部屋に行き、電球つけて籠ってたな。誰にも邪魔されない、自分だけの世界。まさか、こんなことをしてたとは……。

ふん、でも、僕のことなんてそっちのけで、やるべきこともせずに、こんな絵を描いてたわけか。

「ワン！」

急にキッチンの方向から、モチが僕目がけて走って来た。なんだ、そこに隠れていたのか。

そうだ、餌やるんだった。僕は、アンティーの部屋の絵を横目で見つつ、キッチンに戻った。

「ウェイト」

僕は精一杯「待て」のサインを出した。にも関わらず、この犬は総無視でドッグフードに飛びつきやがった。

窓の外に目をやると、さっきの雨はもうすっかり上がり、代わりに太陽が顔を出していた。島の天気は、気まぐれだ。

車の音がした。家の前にボロ車が止まる。アンティーだ。

「はあ、はあ。ソー、ホット、ホット」

息を切らしたアンティーが玄関から入って来ると、モチが吠えながら、一目散に彼女へ飛びつ

く。
「へイ、馬鹿犬。スイット、ダウン」
モチは、大人しくお座りした。この犬、アンティーの言うことは一発で聞きやがる。
「あの、新入りのハオリの店長。いばり散らして。給料下げたうえに、人の休みまで減らしやがって」
アンティーは「ハオリ」とかいうわけのわからない言葉をぶつぶつつぶやいていた。
「はあ、疲れた。もう歳だからねえ。ちょっと休ませておくれ。外で一服してくるから、おばあちゃんのためにコークフロートを作っておくれ」
そう言って、彼女はポーチに出て行った。
都合のいい時に、この人はおばあちゃんになる。はいはい、コークフロートですね。って僕はメイドか。またぶつぶつ言いながら、コーラを背の高いグラスについで、アイスクリームをひとすくいぶち込んだ。コーラの泡がクリームをシュワシュワ音を立てて溶かし始める。うまそうだ。ついでに自分の分も作って外に出た。
彼女はボロ車の隣の古びたベンチに座り、遠くの山々を見つめながら、タバコをふかしていた。いつの間にか、モチも寝転がってそこにいる。
空には、先程の雨が運んだのだろう、大きな虹が山の上に架かっていた。綺麗だ。こんなに七色が鮮やかで、くっきりした虹、見たことない。いや、七色どころじゃない。一色一色の間の微妙な色まで鮮明に見える。しばらく見取れていたが、アイスクリームが溶け始めているのに気付

く。

「アンティー」

「おお、マハロ」

アンティーは僕が差し出したフロートを受け取ると、笑顔でタバコの煙を、プハッと僕の顔に吹き付けた。咳きこんだ僕を見て、笑いながら「ソーリー、ソーリー」と言う。

アンティーはどれどれと、フロートを一口飲んで言った。

「やっぱり、こんな暑い日にゃ、コークフロートがナンバーワンだね。まあ、座りなさいな」

彼女は少し横に寄って、僕の座る分を開けた。断る理由もないので、腰を下ろしてみる。とても静かだ。車の音一つしない。フロートを口に含んだ。うまい。ごくりと飲み込む音が、やけに大きく響いた。

「そうだ」

アンティーは急に立ち上がり、ボロ車のトランクを開けて、大きなチリペッパー味のチップスを取り出す。そして、その袋を腹から開けて、アンティーと僕の間のスペースに広げる。

「今日のランチだよ」

アンティーは、にっと笑った。ウソだろう？

僕は呆れながらも、さっき見たアンティーの絵が気になって、何か質問してみたかった。でも、適当な言葉が見つからない。それに、英語で話さなきゃならないから、変に構えてしまう。

先に口を開いたのは、アンティーの方だった。

「ここは綺麗なところでしょ、やあ？」
彼女は、ボリボリと音を立ててチップスを食べる。
「そうだね」
僕は、ゆっくりと答えた。「あんたの家は汚いけどね」と言ってやりたかったが。
「なんで、あたしがここに住んでるかわかるかい」
僕は首を横に振った。
「うるさくないからだよ、色んな意味でね。田舎はいいさ」
僕は黙ったままだ。しばらくの間、沈黙が流れた。
「田舎は静かだろ。あんたが今から行く大学のあるホノルルは、ノイジーでクレイジーなところだよ。観光客とか、よそ者ばっかりでにぎわってる。そうだね、若い頃はまだ楽しかった。でも、この歳になってからは、やかましいだけさ」
アンティーは煙たそうな顔をする。実質的に煙たいのは、僕の方だ。
「でも、ここは違う。周りは、ほとんど顔の見知ったロコだ。」
ロコ……。恐らくローカル、地元の人のことだろう。アンティーは、静けさに身を漂わせるように、ゆっくりと瞬きをして言った。
「ハオリも少ないね」
さっきから聞くその「ハオリ」って、一体何なんだ。
「んま、店長はハオリになっちまったがね」

音からして、英語には聞こえない。僕は顔をしかめた。
「ああ、そうか。お前さんはわからんね。もともとハワイ語で『外人』って意味だがね。まあ、特にホワイト・ピーポーのことだよ」
ホワイト・ピーポーって……。
「その人達が、どうしたの?」
僕は、まだ慣れない英語で聞いてみた。
「どうしたってわけではないがね」と言っておきながら、彼女は鉄砲玉が飛び出すように話し始めた。
アンティーのおばあさんがハワイに移住して、サトウキビ・プランテーションで労働していたころ、朝から晩まで、ひどくいばった白人の監視人が指揮をしていたこと。そして、今も島に乗り込んできては、郷に従おうともせず、傲慢に振る舞っているのだとまくしたてた。
「島には島のリズムがある。ロコにはロコの色がある。奴らはそれを、ちっともわかっちゃいない」
彼女は、タバコを灰皿に力強く押しつぶした。
僕は近くに白人がいるのではないかと、あたりを見渡した。遠くに草刈りをしている色の浅黒いおじさんがいたけれど、幸い、白人ではなさそうだ。
考えてみれば、確かにちょっとひどい話だ。でも、そこまでして嫌うか。それに、プランテーションの話なんて、アンティー自身じゃなくて、おばあさんの時代のことだろう。いい加減、根

に持ちすぎだ。これじゃ、僕の抱いていた、カラフルなハワイのイメージが崩壊してしまう。ただでさえ、アンティーのせいで、イメージは暴落しているのに。
消えかかっている虹を指さして続けた。
「誰かが言ったもんだよ。ハワイは『レインボー・パラダイス』ってね」
「レインボー・パラダイス？」
「そう。カラフルな人種が、それは仲良く暮らしてる楽園だって」
僕も、てっきりそう思ってた。
「そんな御伽の国が、この世の中のどこにあるのかね」
アンティーは笑って言った。なんだか、怖かった。それは、確かに綺麗事かもしれないけど。とても難しいことかもしれないけど。まだハワイに来て間もない人に、そこまで言うか。ひどい人だ。ああ、やっぱりこんな人と早くおさらばしたい。早く一週間が過ぎないだろうか。
また、しばらく沈黙が流れた。その間を、アンティーが吐くタバコの煙がのろく流れる。
「あたしが嫌いかい」
突然、アンティーが言った。そりゃあ好きになれっこないが、そうも本人の前では言えまい。でも嘘も言いたくないから、僕は黙ることにした。
「ひひひっ、わかりやすいね。リトルボーイ」
アンティーは、魔女のように、気味悪く高笑いした。なにがリトルボーイだ。僕は立派な成人だ。

「帰りたきゃ、帰りゃあいい」
僕は眉をひそめた。
「でもいたけりゃあ、いればいい。あんたにゃ、自分のことを自分で決める権利がある」
ああ、出てやるよ。今日の夜、荷物をまとめて、明日一番のバスでどこかへ行こう。アンティーの絵だって、もうどうでもいい。大したことない。ただの趣味だろう。もう一度言っておく。絵画を心から必要としてる人なんて、世の中にはほんの一握りもいないんだ。そうだ、もうこんな家は沢山だ。
とは考えても、ここを出たら寝泊まりする場所がない。いくらハワイでも、野宿は危険だ。やっぱり大人しく、一週間が過ぎるのを待つしかないのだろう。地味に悔しい。
タバコの煙に支配されて、時間が止まってしまったような心地がした。僕は煙を掻き分けるように立ちあがった。
「ちょっとこの辺、散歩してくる」
僕はアンティーを横目で見ながら、歩き始めた。聞いているのかいないのかよくわからない、虚ろな目をしていた。
僕は、あてもなく歩いた。日はすでに傾き始めている。どこも似ている大きな平屋の住宅街を進む。緑の芝生が、金の夕日色に染まって眩しい。十メートルおきに、馬鹿でかい犬に吠えられた。その度に心臓が激しくバウンドする。しばらくすると、夕日に輝く海が見えてきた。遠くで船が行き交っている。岸辺では、背の高いヤシの木たちが、気持ちよさそうに海風とスイングし

ていた。スローレゲエに合わせて踊っているみたいだ。
　気がつくと、僕は見慣れたベイに来ていた。昨日アンティーと来た場所だ。港の先には、彼女の働く、海の家がある。
　だいぶ傾いた夕日は、空と海をお揃いに、ピンクや紫に染めている。背後に広がる山々も、藍色に塗られていた。堤防に座り、身を寄せ合うカップル。港の両サイドには船が止まり、釣りをしている人々が見える。彼らの身体は逞しく、黒く光っていた。
　そんななか、一人だけ白い肌をした白髪のおばあさんが、もうとっくに閉まっている海の家の前のベンチに腰掛けて、夕日を眺めている。僕は、夕日でぼやけた老婆の姿を、しばらく見つめていた。絵になりそうな風景だった。
　少しして、おばあさんはくるりと向きを変え、ゆっくりとこちらに向かってきた。足が悪いのだろう、片足を引きずっていた。次の瞬間、彼女の体がぐらっと揺れた。僕は気のせいかと思って、もう一度眼を凝らしてみた。が、やはり彼女はつまずいたのか、地面に腰をついていた。僕は、一瞬どうしようか迷った。頭の中に「ハオリ」という言葉がよぎる。でも、僕には関係のないことだ。思い切っておばあさんの元に駆け寄った。
「大丈夫ですか」
「ええ、大丈夫ですよ。よくこうやってつまずくんです。この歳になると、足が言うことをきかなくて」
　おばあさんは、なんでもないように、目尻に皺を寄せて笑って言った。僕は、緊張を抑えなが

ら尋ねた。
「家は、この辺、ですか」
「すぐ近くよ」
そう言いながら、横にある錆びたポールに掴まって立とうとするが、また地面にお尻をついてしまう。見ていられない。僕は、反射的におばあさんの前で背を向けてしゃがんでいた。
「どうぞ、僕に、掴まってください」
おばあさんはびっくりして、青色の目を真ん丸にしている。自分で出た行動に、少し恥ずかしくなった。耳が熱い。でも、今更引けるわけがない。
「遠慮、しないでください」
彼女はまだ驚きを隠せなかったようだが、しばらくして言った。
「優しいんですね。じゃあ、甘えちゃおうかしら」
彼女は、ゆっくりと僕に重心をかける。そして、すっぽりと僕の背中に収まった。
「こんなの、何十年ぶりかしらね」
おばあさんは照れくさそうに言う。
僕は黙って、おばあさんの示す方向に歩いた。
「あなた、どこから来たの？この辺の方ではなさそうね」
やっぱり、僕の話し方でばれてしまうのだろう。
「日本から来ました。今は、ホームステイ、していて」

「そうなの。いいわね」
しばらく歩くと、一軒の平屋が見えてきた。もうだいぶ暗いから見えにくいが、古い感じは伝わってきた。
「ここよ」
おばあさんはドアの前に来ると、鍵をポケットから取り出した。僕は、彼女を抱えたまま向きを変えて少ししゃがみ、おばあさんに鍵を開けてもらった。部屋の灯りをつけると、とても温かく清潔感のある様子が浮かび上がった。僕は、おばあさんの身体をそっと玄関のホールに降ろした。おばあさんはゆっくりと立ちあがり、靴箱にもたれかかりながら、足を少し動かして確かめる。
「もう足は大分良くなったみたい。ありがとう。あなたのおかげよ。せっかくだから、どうぞ上がっていってちょうだい」
すぐに帰るつもりだったから少し悩んだが、久しぶりの綺麗な家だし、ちょっとお邪魔しますか。
僕は、おばあさんが土足で家に上がるのを見て、靴のまま入る。真っ白な壁に、所々に置かれている、色の濃い、昔ながらの木製の家具が調和している。蝋燭のようなオレンジ色のランプの光が、更に味を出している。ヨーロッパの民話なんかに出てきそうな家だ。アンティーの家とは大違いだ。
おばあさんに誘導されて、一枚板でできたような大きなテーブルの腰掛けに座る。おばあさん

は足をひきずりながら、キッチンに向かった。僕も手伝うと言ったが断わられた。お客さんは座ってて、お湯を沸かし始める。

一面を見渡せるリビングには、いくつかの絵が飾ってあった。時計塔の見える、ヨーロッパを思わせる古い街並み。読書をする、黒髪の女性の肖像画……。

ふと、リビングの壁の中央に掛けてある、絵が飛び込んできた。さっき僕らがいたベイの絵。太陽の光線で輝く海を行きかう船と漁師達。光と影を織りなすコオラウ・マウンテン。鼓動が高鳴る。どこかでも似たような感覚を覚えた。写実的なラインが揺れ、柔らかな色が重ねて乗せてある。アンティーだ。アンティーの部屋で見た絵とよく似ている。

でも、鮮やかで、くっきりとしたレインボーが、海と山を繋いでいる。アンティーの、「レインボー・パラダイス」という言葉が脳裏に浮かんだ。まさか、アンティーの絵ではないはず。でも、見れば見るほど似ている。僕は思い切って尋ねてみた。

「すみません、これって、どこで手に、入れましたか」

冷蔵庫にもたれかかっていたおばあさんが、身を乗り出した。

「ああ。これはね、私の友達が描いてくれたの」

「友達って……」

彼女は、足を引きずりながらこちらに向かってくる。

「ミス・コバヤシって方よ。綺麗でしょ。とても気に入っているの」

やっぱり。

「彼女、新しいものを描いては、こうやって持ってきてくれるのよ」
「どうやって、彼女を、知ったのですか」
「彼女、さっき私達が会ったベイの、海の家で働いてるの。私、向こうのロコモコ・ベントーが好きでよく買っていたわ。その時に仲良くなってね。ある日、港を通りかかったら、仕事が終わった後に、彼女、港の絵を描いてたわ。丁度雨が上がって、綺麗な虹が出ていたの。彼女の絵のなかの虹はもっと美しく見えた。鮮やかで、くっきりとして、でもどこか優しくて。私うっとりして、思わず声を掛けたの。そうしたら、その絵を私にくれたのよ」

まさか、アンティーが？

「私ね、息子はいるけど、家族でメインランドに住んでるものだから、一人なの。夫も五年前に亡くなってしまって。だけど、彼女ったら、私を気にかけてくれて、話し相手になってくれるし、大好きなロコモコ・ベントーもプレゼントしてくれるから、嬉しくてね。本当に素敵な友達だわ」

ゲストの僕にさえ何もしてくれない人が、そこまでやるのか。信じられない。

おばあさんは冷蔵庫から、マカダミアンナッツとココナッツパウダーが振りかかったチョコレートケーキを出してくれた。足に気を遣いながら、僕の斜め向かいの席にゆっくりと腰掛ける。

「ここだけの話だけど……」

そう言っておばあさんは話し始めた。

「ハワイでは、私みたいな白人はあまり好かれないみたいなの」

おばあさんの遠くを見つめる目は、とても寂しそうだった。

「だから、私はここで生まれ育ったのに、ロコなのに、いつまでたってもよそ者みたい。幼い頃からそうだった。学校でも、あまり友達はいなかったわ。一人で読書をしている時間の方が多かった。今でも、観光客だと間違えられることがよくあるの」

おばあさんは眉を下げて、笑った。僕は胸がきゅっと締まって、痛くなるような感覚を覚えた。お湯が沸いた。僕は立ちあがって、二つ用意されたマグカップにそれを注ぐ。

「どうもありがとう」

おばあさんは、そう言って、ティーバッグをそれぞれのカップに入れる。だんだんと色が染みでて濃くなっていく。

「でもね。ミス・コバヤシだけは違ったわ。こんな歳とった白人にも優しくしてくれた」

僕は彼女の次の言葉に耳を澄ました。

「一度ね、どうしてそんなに優しくしてくれるの?って聞いたことがあるの。あなたは、ハオリのことが嫌いじゃないの?って」

彼女は一口ティーをすすった。僕もそうした。トロピカル・フルーツの風味が、口いっぱいに広がった。

「彼女はこう言ってたわ。『嫌いじゃないといえば嘘。でも私は、あなたのことは好き』って」

彼女はブルーとグレイが混ざった目で絵を眺めていた。

「この絵を見ているとね、ああ、私の居場所はハワイなんだなと確信できるの。不思議ね」

彼女の瞳の中には、レインボーが写っていた。

「今日も彼女、仕事帰りに少し寄ってくれたの。今、ホームステイのゲストを受け入れているって言って、楽しそうに話していたわ」
どうやら認めざるを得ない。この家に通っているのは、間違いなく、アンティーだ。
少ししてから、おばあさんははっとしたように僕を見た。
「そういえば、確か日本から来ているとか言っていたけど、それ、もしかしてあなた?」
「そう……かもしれません」
僕は曖昧に答えた。
「偶然ね！驚いたわ」
おばあさんは微笑みを浮かべながら、僕を見つめた。
「あなたラッキーよ。あんなにいい人に恵まれて」
そうなのかな……。
「そうだ、夕飯食べていきなさい。私がミス・コバヤシには電話しとくから。っていっても残りものになってしまうけど」
「だ、大丈夫です。僕、家に帰ります。アンティーが、夕飯作って、待って、いますから。電話も、しなくて、大丈夫ですから」
僕は玄関に向かい、有無を言わさずお辞儀をすると、早足でアンティーの家へ向かった。アンティーが夕飯を作っているかどうかは置いといて、もっと長居してしまったら、面倒なことになりそうだと思ったのだ。

あれは、間違いなくアンティーの絵だ。でも、よくわからない。あんなに白人のことをぼろくそ言っていたのに、まるで別人みたいだ。あの人、何か企んで、おばあさんにくっついてるんじゃないのか。

先程寄った港はとうに暗く、陸と海の境界線も見えない。どうやってここまで来たのかあまり覚えていないが、とりあえず歩調は緩めないでおこう。平屋の住宅街。姿の見えないどでかい犬達に、また吠えられるのではないかとびくびくしていたが、幸い、吠えられたのは一度で済んだ。どれだけ歩いたか。やっとで見覚えのある通りに出た。アンティーの家はもうすぐだ。僕は更に歩調を速めた。見えてきた。光が。汚い家が。なんだか少し懐かしい気さえした。

ドアは大きく開かれている。僕は特に何も言わず、さりげなく家に入ろうとした。

「ワン！」

「タカ、遅い！」

モチが一目散に駆けてくる。駄目だ、こりゃ。

アンティーがドアの前に来て、鬼のような形相で叫んだ。

「ソーリー」

僕は、あまりの恐ろしさに一歩引いて、素直に謝った。

「いつまで、ホロホロ外歩いてるんだい。ハワイだって安全じゃあないんだよ」

ぐちぐちいいながらキッチンに戻る。どこに行ってたのか聞くことはなかった。

「はい、突っ立てないで手伝いなさい」

アンティーは、玄関で立ったままの僕に言った。僕は、キッチンに行って手を洗う。

「ポキだよ。生のトゥナを、アボカドと一緒に、ヴィネガーとショウユ、ミリンとジンジャー、チリペッパー、ゴマであえるのさ。ロコで知らない人はいない。調味料は入ってるから、ヘイ、混ぜい」

僕は、言われたとおりに混ぜる。へえ、ハワイの人も生魚好きなんだ。刺身好きの日本人みたい。とてもいい匂いがする。

「味見してごらん」

僕は、一つまみポキを口にした。酢加減と、ピリっとした辛さが良い。

「グッド」

アンティーは疑い深い目で僕を覗いて、味見する。

「ヘイ、ヴィネガーが足りないだろうが。リトルボーイ。まだまだだね」

おい、僕はポキなんて生まれて一度も食べたことはないんだぞ。どんな味が良いのかなんて、わかるわけないだろう。それに、リトルボーイと呼ぶのは、頼むからやめてくれ。

「よし、これでヴィネガーもいいくらいだ。仕上げにこいつをかけるのさ」

アンティーが、納豆を混ぜながら迫ってくる。

「え、納豆入れるの」

「これが美味しんだよ」

めちゃくちゃだな。でも、悪くないかも。

「あ、グリーンオニオンも入れなきゃね」
アンティーははさみを持って、庭へ行く。
ご飯も炊けたようなので、僕は急いでテーブルのセッティングに取り掛かる。しかし、テーブルの上に食べるスペースなど、どこにもない。新聞、雑誌、スナックが山積みになっている。
アンティーが、ねぎを持って帰ってきた。
「アンティー、テーブルの上にあるの、どうするの？」
「適当に降ろせばいいだろ」
アンティーは、こちらも見ずに、まな板の上でねぎを切りながら言う。
僕は、言われた通り、積まれたものを、適当に他の棚や地面の上にどけた。
「おい、クーポンが載ってるやつは、まとめて置いときなさいよ。適当に置くんじゃないよ。わかったかい。ハナホウ？」
さっき適当に置けって言ったくせに。
なんとなく片付いてきたので、二人分のご飯を茶碗に盛る。そして、ポキの入った容器も一緒に、テーブルへ運ぶ。
キッチンでは、アンティーの作るもう一品が出来上がろうとしていた。これまた、見たことのないメニューだ。
「ベトナム料理。フォーというヌードルスープだよ。ベトナミーのお客さんから習ったんだ。よし、そろそろいい頃だ。これで終わりっと、オールパウ」

アンティーは火を消して、スープをボウルに注ぐ。
「ほれ、これもさっさと運びなさい」
僕は急いでキッチンに戻り、ボウルを手に取った。湯気とともに、いい香りが漂う。日本でいう、そばとかうどんに当たるのかな。
「ビーフの骨が入ってるんだ。だしが効いてるよ」
「上にある、緑の葉は、何?」
「ミントさ。肉ともやしに合うんだよ」
へえ。アンティーは、ブレークファストやランチは手抜きだが、ディナーには本腰が入る。やればできるくせに。
だいぶ腹が減ってきた。
「おう、アイガラゴーしーしー」
突然、アンティーは膀胱部を抑えてトイレへ駆け込む。本当に、品のないおばさんだ。僕は席に着いて、アンティーを待った。でも、おいしそうなものを目の前にしては、もう待てない。
「はあー」
数分後、アンティーは爽快な顔をして戻ってきた。
「なんで、さっさと食べればいいのに」
「いただきます」
僕が即座に言うと、アンティーも真似した。

「イッタダキマース」

納豆入りポキを口に運ぶ。うまい、お箸が止まらない。納豆がマグロやアボカドの風味に、見事にマッチしている。

「言ったろ。納豆はポキにあうって」

得意げに言う。

「フォーも、ほれ」

今までに飲んだことのない、少し癖のある酸味がある。おそらくミントがそうさせているのだろう。でも嫌いじゃない。

改めて、テーブルの上のカラフルな食べ物達を眺める。

「何か日本で美味しい料理があったら、教えておくれ。あたしゃ、それを習うために、ホームステイのホストをしてるんだからね」

アンティーは、少女のように目を輝かせている。日本の美味しい料理。そうはいわれても、沢山あるし、すぐには浮かんでこない。それにたぶん、アンティーの方が僕よりもずっと知っているかもしれない。

「ないのかい。つまらんね。まあ、思い出したら、いつでも教えなさい」

いつでも。あと四日しかないけど。

「あたしゃ、あんたが帰ろうが、帰るまいがいいけどね。でも、あんたが居たいって言うんなら、好きなだけ居ていいんだよ」

アンティーは、フォーをすすりながら言う。本当に、そんなこと思ってるのかな。
「ホストなんて、夕食さえ作ればいいんだからね。簡単さ」
アンティーは笑う。ひょっとすると、本気で言っているのかもしれない。モチもこっちを見て、尻尾を振っている。
「あー、明日も仕事だ仕事。また、あのハオリの店長と顔を合わせにゃならん。朝っぱらから、嫌だね」
まだ言っている。
「ごちそうさまでした」
僕はそう言うと、重くなったお腹を擦りながら立ちあがり、食器を片付けに行く。世の中は、思っているよりも矛盾だらけで、複雑だ。
アンティーは、フォーを最後の一滴まで飲み干すと、席を立ち、いつものように食器も片付けず、背中を掻きながら、部屋へ戻っていく。僕は知っている。絵の続きだろう。後ろ姿を見送り、僕はしばらくアンティーの部屋の方向を眺めていた。
「レインボー・パラダイス」か……。
ふと、おばあさんの家に架かっているレインボーの絵が思い浮かんだ。
「この絵を見ているとね、ああ、私の居場所はハワイなんだなと確信できるの。不思議ね」
おばあさんの目に映っていた、アンティーの描いたレインボーは、幻ではなかった。もしかすると、僕が思っている以上に、絵を必要としている人は存在しているのかもしれない。

そうだな。あと少しここにいるのも、まあ悪くない。

上間　美香（うえま　みか）／法文学部・国際言語文化学科四年次

小説部門佳作

歪んだかざぐるま

知念　紘己

「もうすぐ、三時ですね。漆原さん」相模は病室に飾られた時計を見た。張り詰めた空気をほぐすためではなく、単にあと八分四十三秒後に指針が三時を指すから、そう言っただけだ。

漆原は相模に顔を向ける事無く、時計を見つめたまま「そう、だね」と呟いた。その表情は、いつもの様なわざとらしい笑みを貼り付けておらず、とても強張っていた。先ほどから彼女の目は、時計の針を追っている。一秒の針の動きさえ、鈍く感じているんだろうな、と相模は推測した。相模ら『疫病神』にとっては一秒だろうが一年だろうが同じ感覚なので、時間の些細な錯覚など、理解できない。

この病室には三台のベッドが設置されているが、今それを利用しているのは漆原だけだった。他の患者はいない。普段ならここに看護師の本田がいるのだが、彼女は今出払っていた。だから、現在この病室にいるのは相模と漆原だけだ。

相模はポケットに入れておいた調査書を取り出す。それには漆原の情報が細かく明記されていた。この調査書は興信所に依頼したわけではなく、『疫病神』が仕事をする際に渡される支給品のようなものだった。今回の仕事では二人分あった。漆原と今回の仕事の対象となる『加害者』だ。すでに何度も目を通しているが、今は仕事が成功するかしないかの分かれ目なので、必要だと思うところだけ、ざっと確認する。

漆原沙織。二十四歳。高校卒業後、コールセンターに勤務。三カ月前、『疫病神』の働きにより、深夜に交通事故に巻き込まれ、近くの市民病院に搬送され、現在も入院中。面会に来るのは、地方に住んでいる両親が月一回程度。会社の同僚が週に二、三回程度。漆原沙織が拒否しているため、『加害者』との接触はなし。

ここに出てくる『疫病神』というのは相模のことを指していた。一度不幸にした対象と再び接触するのは、珍しい事だった。

漆原はベッドに寝そべっている。三ヶ月前、左足に巻かれたギプスは取り除かれていたが、未だにテーピングは巻かれており、ベッドの縁に取り付けられた器具によって、吊らされていた。そんな彼女の両手に金属バットを抱え込んでいる姿は、異様な光景だった。その道具は、相模が先ほど彼女に手渡した物だった。金属バットがスポーツに使われる道具であることは、相模でも知っていた。人間が投げたボールを、人間がバットで打つ。そして得点を得る。彼女がする事はそれと何の変わりも無い。今から訪れる『加害者』の左足を、漆原がバットで叩きつける。そして、幸せを掴む。私も仕事を完了できる。いいこと尽くしだ。

「本当に、来るんでしょうね」漆原は上擦った声だ。緊張をほぐすためか、慣れない手つきで、金属バットを弄っている。
その質問は三度目だ、と相模は言いかけたが、喉元で止めた。同じ事を繰り返すのは人間の本質だ。仕方ない、と納得するしかない。「ええ、絶対、来ますよ」
「本当に、『加害者』以外は、来ないんだよね」その質問も三度目だった。「ええ、誰も来ません。そうなるように、細工をしておきました」
「細工って、つまり、不幸を起こしたって事?」漆原の声に憤りが含まれていた。彼女自身、相模が起こした不幸で事故に遭っているからだろう。
相模は頷いた。「まあ、そう言っても小さな不幸ですよ。ちょっとしたトラブル、です」ナースコールの故障や会計所の混雑程度だ、と説明する。「おかげで、漆原さんは動きやすくなった」
「そうだけどさ」漆原の憤りがしぼんでいくのがよく分かる。
「不幸っていうのはつまり、誰かの幸せですよ。漆原さん」相模は諭すように、言う。これは以前、一緒に仕事をした同僚の台詞だった。その同僚は人間を観察する事が趣味らしかった。
「人間は、幸せになりたいって考えてる奴は大勢いるけど、実際、幸せを掴み取ろうとしている奴はほんの一握りだ」相模達が現場の下見のため、とあるビルの三階にあるファストフード店に訪れた時、そんな事を言っていた。
「あれを見ろ」彼はハンバーガーを不味そうに齧り付きながら、外を指差す。ビルの下はスクランブル交差点があった。歩行者信号が赤から青へと切り替わった瞬間、人間が我先へと一斉に動

き出す。「あいつらは、ああやって必死で生きている。必死で歩き、必死に仕事をして、必死に金を稼ぐ」
「僕達とは全然違いますね」
「まあな。だけど、それは幸せになるためじゃねぇ」
「じゃあ、何ですか？」
「不幸にならないためだ」同僚は憐れむ様な目で、外を見下ろす。「ああやって必死になるのは、隣の奴より寂れた人生を送りたくないからだ。それは、夢とか憧れとか、そんなもんを追いかける気持ちより、はるかに強い」
「そういう、ものですか」
「そういうもんだ。結局のところ」同僚は最後の一口を飲み込み、ジュースを流し込んだ。「俺達は人間の背中を押してやっているのさ。あるいは、迷える子羊たちを、導いている。多分、俺達がいなければ、人間は自分の道を決められない、怠け者だらけになっちまう」別にそれでいいじゃないですか、と相模が率直に主張すると、それもそうだな、とあっさりと肯定した。相模はこのやりとりは無駄であり、さっさと仕事に取り掛かったほうが良かった、と思っていたが、案外、耳に残っていた。
そして、彼が言っていた台詞をそのまま、漆原にぶつける。「僕達は意味の無い不幸は起こしませんよ。誰の得にもならない不幸を起こすのは、人間だけです」
漆原は何か言いたそうにしていたが、そこでノックの音が部屋に鳴り響く。彼女の身体がびく

りと震え、金属バットを握り締める手が強くなり、目がぎらつく。そして、ドアがゆっくりと開いた。

隣で掃除をしていた本田が不意に「来ましたよ」とささやいた。今から注射しますよ、と警告する時の口振りに良く似ていた。痛いですよ、気をつけてくださいね。

私は時計を見る。三時だった。ああ、もうそんな時間か、と私は内心で呟く。

「どうも、漆原さん。元気、ですか」感情が全く篭っていない声が耳に届く。私は暇潰しに読んでいた新聞を折りたたみ、傍らに置いた。病室の入り口へ視線を移す。やはり、相模が立っていた。

相模は三十代半ばに見えた。長身痩躯で、相変わらず姿勢が悪い。そして、こちらが顔を覗いても、視線を合わせない。

彼は断りもなく病室に入り、いつものようにベッドの横に配置された椅子に座った。相模が目の前に来た瞬間に寒気がしたのは、気のせいではないだろう。何故なら、目の前の男が比喩でもなんでもなく、『疫病神』だからだ。

「元気も何も」私は器具で吊るされ、身動きの取れない左足を指差す。「相変わらず、左足は動かないですよ」

「そうですか。大変そうですね」相模は他人事の様な言い方だ。彼の話を信じるのならば、事故

の原因は運転手の前方不注意ではなく、相模自身が災いの原因であり、つまり私が三ヶ月近く病院で寝たきりになっているのも、彼のせいだと言える。
私は病室の窓から頭を出す。代わり映えのない、景色だ。ここは四階なので、広く見渡せた。病院の前には大きな道路が伸びており、そこから百メートルほど離れた所では痛々しいタイヤ痕がまだ残っていた。その付近のガードレールはひしゃげている。未だに事故の後が残っていた。私はそれを見る度、左足が軽く痛む。
「ねえ、相模さん。知ってる？　私の怪我の名前」私は痛みを紛らわせるように、唇を動かす。あなたが起こした事故で作った怪我ですよ、とは余計なので言わない。
「さあ、分かりません」相模はこっちの意図を知ってか知らずか、悪びれもせずに言った。
「長ったらしい名前なんだよ。ええっと」私は記憶を探る。確かその名前は、訳も分からず病室のベッドに寝かされていた私に、無愛想な医者が淡々と読み上げていた。記憶を捻り出すように、こめかみに親指を当てるが、思い出せない。「何だっけ？　本田さん」
「大腿骨骨幹部骨折、ですよ」
部屋の隅で黙って立っていた本田がぎこちなく答えた。本田は二十代前半で、私より歳が二つ下で、その顔にはまだあどけなさが残っていた。普段の彼女なら誇らしげにしているのだが、今は体を強張らせていた。
本田がちらり、と相模を横目で見たのを私は気付いた。その瞳には気味悪がっていることがありありと分かる。そして、その瞳を私にも向けた。私と相模とのやりとりを悪ふざけだと捉えて

いるようだ。
私は彼女の視線を躱し、「そうそう、大腿骨、骨幹部、骨折」と相模に向け、「相模さんはさ、これに似ているんだよ」と左足を揺らす。
「似ている？　僕はそんなに痛々しいですか」隣で本田が眉を吊り上げているのが分かった。今にも詰め寄りそうな気配がある。「そういう意味じゃなくてさ」私はおどけた口調で、その場をなだめた。
「私はさ、事故に遭うまでに骨が折れただけで、こんな長い名前があったなんて知らなかったんだ。多分、机の角に小指をぶつけたとか、打ち身になったりした時も、きっと何かしらの名前はあったんだ。今までの事件や事故に相模さん達『疫病神』は関わっていたんでしょ？」
「まあ、全てというわけではありませんが、そうですね」相模はぼそぼそと喋るので、意識して耳を傾けなければならなかった。
「今までの事件や事故にも『疫病神』っていう名前が本当はあるって事だよ。私達が知らないだけで。つまりはさ、『疫病神』も病気の一種なんだ。人格を持った、病気だ」
私が相模に対して、憤りも悲嘆も湧き上がらないのは、そこから来ているのだろう。動かない左足、厳密に言えば膝の関節が一四〇度以上曲がらない足に対して、「ほら、動けよ。怠けるなよ」と叱ったところで、治るわけではない。風邪をひいた時、病原菌に対して「何て事をしてくれたんだ」と怒鳴り散らしても、空しくなるだけだ。体調管理を怠った自分を嘆くしかない。
私はそう言ってから、少し後悔した。いくら『疫病神』といえど、病気呼ばわりされたら、不

快になるのではないのか、と心配したからだ。しかし、相模は特に気にしている様子もなく、無表情ではあったが「病気、ですか。おもしろいですね。そういえば、疫病神の中には『病』って文字が入っていますね」と感心していたように見えたので、杞憂に終わった。

そこで、調子に乗った私は、なんとなく気になった事を、口にする。「『疫病神』が起こした事件とか事故にさ、名前はついてるの？　例えばさ、相模さんが仕事をした事件は相模事件、とか」

「さあ、どうでしょう。仕事が終われば、また別の仕事がありますから、いちいちつけていないと思いますよ。それに」相模は下向きに固定していた頭をゆっくりと動かし、水平に戻す。が、視線は合わない。「漆原さんの事件なんて、名前を付けるほど、大きくないですよ」

「ちょっと」本田が鋭い声を発した。「あなた、見舞いに来たんじゃないの？　さっきから、漆原さんをおちょくっているようにしか、見えないんだけど」

「お見舞い？」さあ、何のことです？　と続けるような言い方であったが、本当に「お見舞いって、何ですか？」と言葉を紡いだので、本田は顔を真っ赤にし、彼に怒声を浴びせようとしたので、私はまあまあ、と気分を落ち着かせるように、なだめた。

「じゃあ、漆原さん。五時にリハビリがあるので、その時に迎えに来ます」そそくさと、本田が病室を出て行く。早足だったのは気のせいではないだろう。相模には帰る様子はなかった。いつもなら、軽く雑談を交えたら、すぐに帰るのだが。

「でさ、実際のところ、何しに来たの？」私は疑問を疫病神にぶつけた。彼は相変わらず床を見つめながら「漆原さんの左足の件で話をしにきました」とぼやく。
「ああ、という事は、お見舞い？　怪我の事？　いいよ、もう別に。許す、許す」私はなるべく軽く聞こえるように努めた。過ぎた事をああだ、こうだと言っても仕方ない。それに、私はアスリートではない。歩けなくても仕事は出来る。
「お見舞い。そうですね、お見舞いです。これからは、お見舞いです」まるで今思いついたかのような言い草だった。
「お見舞いの品も無しに？」私は茶化すように言う。相模は大げさと言えるほどに、「ええ、申し訳ない」と頭を大きく下げた。そして、ゆっくりと顔を上げる。この時、初めて相模は私の目を見た。「代わりといってはなんですが、いい話があります」
「いい話？」疫病神の言ういい話とは何だろうか。私が考えるいい話とは全く違う気がする。
「さて、本題に入りましょうか」相模は大事な話だ、と強調するかのように身を乗り出す。何ともいえない威圧感に押され、私は思わず体を仰け反らせた。
「本題？」
「ええ、漆原さん。その左足、治しますか？」
「は？」まるで、今日の昼食を決めるかのような軽さだ。
「大腿骨骨幹部骨折をですよ」初めから知っていたのか、症状を淀みなく発音する。「ただし、条件があります」

「条件？」何を言っているのかよく分からない。
「六日後に、この病室を訪れる人を襲ってください」
「襲う？　誰を？」
「あなたをそんな風にした『加害者』ですよ」

いつもなら、この時間帯には相模が訪れる。彼はお見舞い、という口実で、『疫病神』の仕事を手伝うよう、迫る。私はしつこい新聞勧誘を受けている気分にされるのだが、今は別の見舞い客が来ていた。「漆原さん。足の調子はどうなの？」「どう、治りそう？」「入院生活は大変？」「うん、まあ、大丈夫」ベッドの上で身動きが取れない私を三人の同僚が囲んでいた。部屋に私達しかいないせいか、声が大きかった。周りに迷惑が掛かっていないか気になったが、それを口には出来ない。
「漆原さんがいないと大変なのよ」「そうなの。漆原さんが担当していたクレーマーが厄介でね。昨日は四回もそいつから電話が来たのよ」「それに、フクチのやつが怒鳴り散らしてくるのよ。きっと、漆原さんがいないせいね」
三人が矢継ぎ早に言葉を投げかけてくるので、「それは大変そうだね。何かごめん」と相槌を打つのがやっとだった。それでも、笑顔は崩さないように心がけた。
目の前の彼女らとは同じ職場であり、そこそこ親しかった。親しい、と言っても一緒に食事を

するような中ではなく、昼休みに雑談を交える程度だ。そんな関係でも、見舞いに来てくれた事が最初は嬉しかったが、途中から愚痴を吐き続けているので、先ほどの彼女らの問いかけにはあ答えたが、実際のところ、内心疲れきっていた。自力で動けないこの状況は怪我の痛み以上に、精神の擦り減りが激しい。昔からそうだった。必要以上に周りの目を気にする私は、他人に迷惑を掛ける事が何よりの苦痛だった。それにより、自分の評価が下がっていくのが怖いのだ。

だから、三人の前ではせめて嫌な顔をせず、話の聞き役ぐらいにはなろう、と私は自分に言い聞かせている。

それから数十分後、同じ様な会話を続け、彼女たちは日頃の不満を全て吐き出せたのか、満足そうな顔で帰っていった。私はそれを見届けると、溜まった疲れを吐き出すように、大きく息をつく。すると、「なるほど、あれがお見舞い、というやつですか」と声が飛んできたので、私は驚いて身体をびくり、と震わす。

ドアの前に相模が立っていた。相変わらず猫背で、ぼやくように「どうも。立て込んでいたようなので、外で待っていました」と言い、のっそりと椅子に座った。

「お見舞いというのは、患者相手に愚痴を吐き続ける事をさすんですね」相模は嫌味を気に留めることも無く、淡々と話す。本人にその意図があるかは分からないが、大抵の人はこの台詞を皮肉と受け止めるだろう。もちろん、私もそうだ。

「でも、それは仕方の無いことだよ」私は弁解する。これは同僚を悪く言われたから、の反論ではなく、本心から出た言葉だった。「私達の職場は特にストレスが溜まりやすいから。ちょっとぐ

らい、愚痴をこぼしたくもなるよ」
「ちょっと、ですか」相模は何か言いたげだったが、「そういえば、お見舞いの品、持って来ましたよ」と別の話題に切り替えた。
「お見舞いの品?」
「ええ、これです」相模はポケットから何やら薄くて四角い、紙の様な物を取り出した。折り紙だ。それから、と鋏やストローも。小学生に図工を教えに来たのか、と勘違いしてもおかしくない。
　何故、折り紙なのか?　と私は思わずにはいられなかった。実際、口にしていた。「どうして、折り紙なの」
「これが、お見舞いの定番だと聞きましたが」相模は無表情のままだったが、上司の言いつけを果たせなかった部下のように、申し訳なさそうな口振りだった。「これで、鳥類をたくさん折る、と」
「鳥類?　あ、もしかして、千羽鶴の事?」
「何やら、縁起が良いらしいじゃないですか」
『疫病神』がそう言うとおかしく聞こえた。「相模さんが言う台詞じゃないよ。というか、病人の私が折るの?　何だか空しいんだけど」それに、私鶴なんて折ったことないし、と付け足す。「あ、でも他のなら折れるかも。例えば」子供の頃の記憶を呼び覚ます。人見知りだった私は他の子供と交わらず、母親と一緒に遊ぶ事が多かった。その時に母親とよく一緒に折っていたものだ。「かざぐるま、とか」

「かざぐるま」相模は響きを確かめるように、呟く。
「そうだね。折ろうか、かざぐるま。道具も揃っているし」私は思いつきで言った。「どうせなら、本格的なやつにしよう」
相模は理解していないのか「本格的なやつ」とオウム返しだ。
私は早速作業に取り掛かる。手順はおぼろげだったが、どうにか完成させる程度までは、折れるだろう。私は熱心に紙を折り、切り、かざぐるまの形を作っていく。左足が吊らされているので、体勢が悪く、上手くいかない。相模はぼうっと眺めているだけだ。それに飽きたのか、折り始めてから十分過ぎたところで「漆原さんの考える一番の不幸、とは何ですか」と訊ねてきた。
「なに、藪から棒に」私は紙を折る手を止め、相模と向き合う。「しかも、不幸について訊くの？幸せとかじゃなくて？」
「まあ、ほら。僕は『疫病神』ですし」十分な理由ですよね、と言わんばかりだ。
「急にそういう事を言われてもね。でも、まあ」私は再び手を動かし始めながら、素直に思ったことを口にした。「私が一番不幸だと思うのは、多分、笑えなくなった時かな」
「それは、どうしてですか」相模は興味なさそうに訊ねる。
「笑えなくなったって事はさ、悲しいでしょ。ずっと泣いているって事じゃん。ずっと下を向きながら泣いている人生なんて、つらすぎるよ」
もっと深く考えれば解答になったかもしれないが、私の中ではなかなか満足のいった答えだった。今までの私の人生は笑顔を貼り付けてきたようなものだった。その仮面が剥がれてしまえば、

どう歩いていけばいいのかも分からない。
　しかし、相模の反応は薄く、「へえ、そうですか」とずいぶんとそっけない返事だったので、私は戸惑い、落胆する。手応えのあったテストの点数が思いのほか低かった時の気持ちと良く似ていた。私は点数に納得いかず、「ほら、ここの解答、合っているんじゃないですか」と喚く生徒のように、「間違ったことでも、言いましたか？」と反論する。相模は肩をすくめただけで、何も答えない。私はもやもやしたまま、紙を折っていく。
　そのせいもあってか、完成したかざぐるまはとても歪んでいた。小学生が見たら、きっと「なにこれ。虫？」と言いそうなぐらい、酷い。
「これがいわゆる『本格的なやつ』ですか」相模が私の成果を手に取り、まじまじと見つめる。この羽に風が受けると、回るのだ、と説明すると、「なるほど。まるで人間の人生ですね」と羽を指で弄り始めた。
私は出来の悪さに納得がいかず、無性に悔しかったので「まあ、この状態じゃ仕方ないよ」と言い訳をした。
「仕方がない、ですか」
「うん、仕方ない、仕方ない」私は試しに、と相模からかざぐるまを受け取り、息を吹きかけてみる。しかし、歪な羽が揺れるだけで、まわらなかった。

歩行器を使った訓練は、予想以上に過酷だった。歩き始めの赤ん坊が使うようなそれは、快適な動きが出来そうに見えたが、一歩進むだけで、痛みに耐え切れず、立ち止まってしまう。鈍い痛みがじわりと体中に広がり、汗がどっと吹き出した。本田が心配そうに何か声を出していたが、聞き取る余裕などない。

私は目の前の壁一面に鏡が貼られていることに気づく。姿勢をチェックするためだろう。ひどい、と率直に感じた。そこに映る姿が、だ。曲がらない関節が下肢をとても歪に見せ、体が人とかけ離れているように思えた。それが自分自身だと気づくまでに、時間がかかった。

「少しずつ、歩けるようになりましたね」本田は私が座った車椅子を押しながら、話しかけてきた。彼女は先ほどのリハビリの成果を回復への一歩だと思っているらしく、声が明るかったが、今の私はその言葉を皮肉にしか捉えられず、「そう、だね」とそっけない返事になった。言ってしまってから、リハビリに付き合ってもらっているのに失礼ではないのか、と後ろめたさが心に滲み始めたので、「初めて、リハビリが楽しいと感じたよ」と付け足した。もちろん、そんな事は微塵も思っていない。

そんな嘘を前向きな姿勢に勘違いした本田は「そう言ってくれると、私も嬉しいです」と声が弾み、「明日も一緒に頑張りましょう」と私の顔を覗き込み、笑った。私の心の染みが、さらに広がっていく。

リハビリ室は二階にあるので、四階の病室に戻るには、エレベーターを使う必要があった。そこに向かう途中で様々な人達とすれ違う。
彼らの視線が私の左足に纏わりつく。好奇心や同情、憐れみなどの色んな感情が混ぜかえっている。私は胃を直接鷲掴みされている様な痛みを覚えた。消化物が喉元へせり上がって行く様な不快さだ。それを押さえ込むため、胸を擦り、誰とも目が合わぬように自分の太ももをずっと見つめていた。もっと速くしてくれ、と本田に心で叫ぶ。
私達はエレベーターに乗り込み、病室に戻った。その間は誰ともすれ違わなかったのは幸いだった。胸の圧迫感も消えかけている。
「ねえ、本田さん。急なんだけどさ」ベッドに寝そべった私は、気を紛らわせるために訊ねる。
「本田さんの考える幸せって何？」
相模の台詞を少し変えた。人に不幸について訪ねるのは、少しはばかられる。
本田は目をぱちくりさせ、「幸せですか？」とやはり戸惑ったが、指を口元に当て、うーん、と唸った後、「ちょっとずれた答えになってしまうんですけど」と質問に応じてくれるようだった。
「私ね、今は看護師をやっているけど、本当はミュージシャンになりたかったんですよ」
「ミュージシャン？　本田さんが？」私は素直に驚く。「何か意外」
「それ、皆に言われます」本田がはにかみながら、続けた。「今の仕事はとりあえず、の気持ちで始めたんですよ。ミュージシャンになるための準備として。でも、やっぱり上手くいかなくて、結局、看護師の仕事を続けていくことにしたんです。そしたら」

「そしたら？」
「ミュージシャンを諦めた途端に、この仕事が楽しくなってきて、案外、幸せだなと思えたんです」
「実際、そう見えるよ」これは皮肉ではなく、本心から出た言葉だった。彼女の働く姿はとても生き生きしている。天職だとさえ思えた。
「それも、よく言われます」本田は屈託のない笑顔だ。そういう風に笑える彼女を私は羨ましく思った。「で、これが私の考えなんですけど、その時に気づいたんです。幸せって妥協出来るんだな、って」
「妥協、か」
確かにその通りだな、と私は思った。今の自分は幸せを望む事さえ億劫だ。理不尽に、左足に一生絡みつくことになった鎖がそう思わせる。それは外す事が出来ない。不幸にそんな選択肢など、ないのだ。
三日前、相模に問われた幸せと不幸の違いとは、まさにこの事ではないのだろうか。選択肢があるか、ないか。妥協が出来るか、出来ないか、だ。なら、相模の提案はどちらに成りえるのだろう。私は選んでいるのか、選ばされているのか。そこまで思考を巡らしたところで、相模の非人道的な提案に、乗り気の自分に気付き、慌てて頭の中から『疫病神』を祓った。
「そういう漆原さんは、どう思っているんですか」
「え？」考え込んでいた私は、本田の問いかけを聞き流していた。

「漆原さんの幸せ、ですよ」
「幸せ、か」私は相模との会話を思い出す。あの時は不幸について答えた。だから、今は新しく解答を導き出さなければならない。しかし、不幸について考えた時と違って、何も思い浮かばない。頭の物置からあれやこれやと手にとってみるが、大して価値が無いものばかりだ。
「ずっと笑えたら、幸せかなあ」結局、私は相模に対する答えをそのまま使う。
やはりというか、本田は「それ、漆原さんらしい」と気持ちよく受け止めてくれた。漆原さんらしい、の部分は耳に引っかかったが。
「でもさ、漆原さん」本田は器用に器具を扱い、漆原の左足を無理なく固定する作業に入る。「ずっと笑うのはつらくないですか？」
本田の台詞が胸を抉った。今まで必死に隠してきたやましい事を指摘された気分だった。
私はとりあえず会話を繋げなくては、と口を開けるが、すぐに言葉は出て来てくれない。かろうじて、「ずっと、泣いているのは、不幸でしょ」と絞り出した。
「ずっと泣いているっていうのは不幸だと言うけど、じゃあ、ずっと笑っているのは、幸せと言えるのかな」
私は本田の雰囲気が変わったように感じた。まだ学生の気分が抜けない、気さくな彼女の面影はなく、人生を達観した成熟な人間の風格を身に纏っていた。
私の左足をしっかりと固定した頃には元の彼女に戻っており、「では、漆原さん。明日もリハビリ頑張りましょう。継続は力なり、です」と無邪気に笑いながら、軽い足取りで病室を去っていっ

た。一人の病室はいつも以上に、寂しく感じた。
私はなんとなく、ベッドの横に置いていたかざぐるまを手に取る。相変わらず、見れば見るほど不恰好だ。そういえば、ずっと窓辺に飾っているものの、動いている光景を見かけた事がない。ふと、リハビリでの光景が頭に浮かんだ。今の私はそれときれいに重なり合う。そう認識した瞬間、手が震えだした。今度は強くかざぐるまに息を吹きかける。しかし、まわらない。何でだよ、と私は叫びたくなる。

「いよいよ、明日ですか。楽しみですね」病室に訪れた相模は開口一番にそう言った。言葉と裏腹に、待ち焦がれていた様子が微塵も感じられない。
「いよいよって」私は不恰好なかざぐるまを窓辺に置かれた花瓶に挿す。私はそれを視界に入れる事すらはばかれる。「私が『加害者』を襲うことができですか?」
「漆原さんが『加害者』と面会する日が、ですよ」
私は決まりが悪かった。まるで、相模の提案を受け入れたかのように思われたからだ。私はそれを払拭するため、「そうね。明日は面会で、相模さんの仕事が失敗に終わる日」とすぐに言い直した。相模は気に留める事なく、「まあ、そうですね」と流した。そこで会話が途切れる。時計の秒針が揺れる音が、病室に響いた。
「あのさ」私は沈黙を破った。「もし、何だけどさ。私が『加害者』を襲わなかったら、相模さん

はどうするの？」

これは今更ながら疑問を感じたことだ。相模の目的は「病室」で、『加害者』を、不幸にする事だ。もし、いや確実なのだが、私が実行しなかった場合、別の計画があるのではないのか、と考えた。私が何もしなくても、『加害者』は結局不幸になるのではないのか。それに、仕事を放棄した事による罰が下るのではないのか、と心配した。

「別に、どうもしませんよ。仕事が失敗して、上司に叱られ、また他の仕事に取り掛かるだけです。漆原さんに罰が下るなんて事もありません」相模はたいして問題でもない、とあっさりと答えた。こんなに私は悩んでいるのだから、もっと困るような事態になってもいいのではないのか。

「まあ、後でもう一度確認しに来ますよ。そろそろ別の客が来そうなので、僕は一旦、退出します」相模は椅子から立ち上がり、そのまま出て行った。別の客、というのは同僚達のことだろう。

私は思わず、溜め息をついた。

再び三人組が現れた時、私は無理矢理笑顔を作って迎えた。度重なる面会は精神を疲弊させる。それに今回も、職場での愚痴を引っさげてきた。彼女らの言葉は鉛を飲まされている様な気分にさせる。

今までの面会でもそうだったが、黙って話を聞いていると、「それは、そうした方が良いのではないのか」と思う瞬間が何度かあった。いつもなら、聞き役に徹するのだが、その日はなんとなく助言した。

すると、たちまち彼女達の顔が曇った。「不幸」について答えた時と同じ様な感覚に陥った。三

人組は途端に口が重くなり、しばらくすると、すぐに帰っていった。
　自分の解答が間違っていたのか。私は反省していたが、すぐにそれは思い違いだと気付いた。彼女達は私に相談したかったのではないのだ。不幸な人に話を聞いて欲しかっただけだ。「自分より不幸な人はいるんだから、頑張らないと」と言い聞かせるためなのか、はたまた、「自分より駄目な奴がいると、安心する」と自分の位置を確認するためか。とにかく、私が不幸の象徴に祭り上げられたことは、はっきりと分かった。
　相変わらず左足は痛むし、思うように動かない。リハビリにも限界が見え始めていた。「元のように歩くのは無理です」無愛想な医者は、表情を変えず、業務の一部と言わんばかりに、淡々と言った。
　何で、私はこんな事になってしまったんだろう。ふと、そんな事を考えた。「それは事故に遭ったからだろ」耳に直接響いた。誰の声かは、分からない。「どうして、事故が起きた?」「私が深夜に酒のつまみを買いに行ったから」と呟くと、「違うだろ。相模が不幸を起こしたからだ」と謎の声が即座に否定する。
「それは違う。相模さんは疫病神で、それが仕事だから、仕方無かったんだ」自分の非を認めない子供のような言い訳をする。「それもそうだな」と幻聴も同調したが、「悪いのは、お前を轢いた『加害者』だ」と付け足した。
「そんな事は」ない、と言うのを躊躇った。躊躇ってしまった。「やっぱりそうじゃないか」ここぞとばかりに、謎の声がせせら笑う。「別に他人の事なんてどうでもいいと思ってるんだろ。自分

の事さえも」
「違う。そんな事はない」私ははっきりと否定するが、自分でも強がっていると思えるほど、無理をしている。
「じゃあ、何でずっと笑っているんだよ」「その方が、周りも楽しくなるし、人生も明るくなる」「何で自分の人生を台無しにした怪我の名前を覚えられないんだ？」「名前がややこしいからでしょ」「何で、急に見知らぬ男が『疫病神』です、と言って、信じたんだ？」「世界に一人くらい疫病神がいてもおかしくないよ」
「違うね」私の半端な否定とは違い、断固とした声音だ。「お前がずっと笑っているのは、楽して適当な人間関係を築きたいだけだし、怪我の名前を覚えていないのは、その辛さを受け入れていないだけ。『疫病神』を信じたのは、他人に興味がないから。でしょ」
私はその声の主が分かった。まぎれもない、私自身だ。
「お前はこのままでいいのか？」
「いいよ、別に」私は精一杯、見栄をはった。
「幸せになるチャンスは、目の前に転がっているんだぜ」
「相手を傷つけてまで、幸せになろうとは思わないよ」
「何を言ってるんだ。幸せになるという事は、つまり相手を不幸にする事と同じだぜ」これが世界の真理だ、と声高らかに言う。「じゃあ、あれか。お前は一生不幸のままでいいから、周りに幸せを振りまくつもりか？　どこの聖人君子だよ、それ。いや、そもそも幸せすら振りまいていな

いか。本当に不幸な人間だな、お前」
「うるさい」私は声を荒げた。病室に響いてしまったかもしれない。
「お前はそれでもいいのか」
「いいわけ、ないだろ」発作的に答えていた。声はほれ見た事か、と自分の予感を的中させた誇らしさを滲ませ、「それが正しいんだよ」と言い残し、聞こえなくなった。
タイミングを見計らったようにドアが音を立てる。相模が入ってきた。彼は挨拶もせず、「答えは出ましたか?」と短く聞いてきた。
私は呼吸を整える。そして、躊躇わずに「やる」と答えた。決意が揺るがぬよう、余計な思考を削ぎ落とした。「私は相模さんの提案に、乗る」
相模はそうですか、と喜ぶ様子もない。

ドラマで、こういう場面で出てくるのは、上等な服を身に纏い、樽のような腹で、禿頭の傲慢な男だな。いや、髪を目につくような色に染め、爬虫類のような顔の青年かもしれない。
私は『加害者』の容姿について、想像をめぐらしていた。そうでもしなければ、病室に張りつめた空気に押し潰されそうだった。
とうとう、ドアがノックされた。私の肺がきゅっ、と締め付けられる。思うように呼吸が出来なかった。まだ三時ではないだろう、後五分は待っていてくれよ、と私はドアに向かって言いた

くなる。
　がらがら、とドアがぎこちなく開く。病室に恐る恐る入って来たのは、金持ちの傲慢な男ではなく、社会に反抗することが信念である若い男でもない。若い女性だった。俯き気味なので、顔ははっきりとは見えない。私より若い。本田と同じくらいか、それより下だろう。どう見ても、学生にしか見えなかった。
　私は初めて『加害者』を見た。事故による保険会社とのやりとりや示談は両親が済ませてくれたし、面会も私が拒否していたので、顔を合わせる機会はなかった。疫病神と出会うことがなければ、彼女と会うこともなかっただろう。
　私は金属バットを握る力が弱くなっている事に気づいた。こんな重い物を長時間持っていたから、疲れたのだ、という単純な理由ではない。
　不幸になりたいのか？　私は自分自身を鼓舞する。このままだと、一生立ち止まったままだぞ。再び、両手に力が籠っていく。
　どうやって、左足を狙おうか。私は肉食獣が獲物を捕らえる準備をするように、『加害者』の全身を舐めるように視る。狙うべきは、あの健常な左足だ。私の左足が固定されている以上、ベッドの傍まで近づいてもらわなければ、届かない。
『加害者』はゆっくり一歩、一歩と私へ吸い寄せられるように、近づいてきた。そこで、顔をはっきりと確認できた。丸い輪郭に垂れ気味の眉。温和な性格が想像できた。とても泣き出しそうな顔をしている。いや、すでに泣いていた。大粒の涙が頬をつたい、喉がしゃっくりを鳴らし

ているのが聞こえる。

「——さい」彼女は何か呟いたが、声が震えていたので、聞き取れなかった。『加害者』は膝をつき、頭を床へ押し付ける。「ごめんなさい。ごめんなさい」かろうじて、聞こえる。その言葉は悲痛さを伴っており、波のように私へ押し寄せてきた。

目の前で加害者が頭を下げ続けているこの状況に対して、私はまず戸惑いを覚えた。もちろん、私が『被害者』であり、彼女は『加害者』の関係なので、傍から見ればそれほどおかしくない光景なのだろうが、事故の原因が相模にある事を知っているため、色んな感情が混ぜかえっている。募らせていた相手への攻撃意識も、すでに霧散しつつある。『加害者』の謝罪が、そうさせているのだ。と気づくまでにそうそう時間はかからなかった。漆原は彼女の左足に金属バットを叩き付ける気持ちでいた。それは相模の提示した条件を達成するためであり、そのため、加害者を記号として認識していた。幸せになるための、記号だ。そんな記号が泣きじゃくりながら両手を床につけ、「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」と壊れたカセットテープのように繰り返す。

そうだ。『加害者』も不幸だったんだ、と私は今更ながら気づいた。相模によって事故の原因に仕立て上げられ、多大な慰謝料を払わされ、私によって謝罪を撥ねつけられる。社会でも大きく叩かれただろう。

私は結論付けた。彼女は私より不幸だ。

そう認識すれば、同情心が湧き上がる。それに、安心感さえも。

「ごめんなさいね」私は慰めるように、赦すように『加害者』を見つめ、笑った。金属バットはすでに手放している。

彼女はびくつきながら、顔を上げる。眼は赤く腫れ、鼻から鼻水が垂れ流れている。酷い顔。私は苦笑する。

『加害者』は戸惑っていたが、言葉の一片を理解したのか、暗かった表情に光が差した。「許してくれますか?」か細い声だ。神様に祈りをささげるシスターのように、切実さが籠っていた。

さっさといつもの様に笑って許して、この場を収めよう。相模の提案など、とっくに忘れていた。

そこから他愛のない話をした。ここがつらかったとか、大変であったとか、つまりは互いの傷を舐め合った。『加害者』は憑き物が取れたかのように顔は晴れやかで、塞き止められていた言葉という言葉が、口から溢れ出していた。彼女は、先ほどの崇めるような目は消えており、同級生と接するような親しげな目に変わっている。

私は適当に相槌を打ち、たまに「それは大変だったね」とか「分かるよ、その気持ち」と相手に共感を示す。そして、笑顔の面をかぶる。

これで良かったのだ。泣き合って和解するなんて、ドラマでいうなればハッピーエンドだ。全て丸く収まった。万事解決だ。

突然、後ろから風が吹いた。長い入院生活で伸びていた髪が無造作に巻き上がる。私はとっさに両手で顔を覆った。『加害者』も体全身で突風を受け、怯む。

何事かと、私はばたつく髪を押さえ、もたつきながらも後ろを振り返る。病室の窓が開いていた。ずっと傍観を決め込んでいた相模が開けたのだ。どうして開けたのか、と問い詰めようとした時、視界の端で何かを捉えた。私は目の動きだけで、それをはっきりと確認する。花瓶に挿してある、かざぐるまだった。そういえば昨日、私は目に映らぬようにそこに移していた。

かざぐるまは風を受ける。煽られ、花瓶の中をがたがたと暴れまわるが、歪んだ羽はまわらない。あんなに強い風を得ても、決してまわろうとしなかった。

「漆原さん」相模が真っ直な目で私を射る。互いの顔を寸前まで近づけられたような圧迫感があった。私は顔を背けたい衝動に駆られるが、『疫病神』の特質と言うべきなのか、とにかく身動きが取れなくなった。

相模の口元が歪んだ。憐れむようにも、嘲笑っているようにも見て取れた。「あなたは、どうしようもなく、不幸だ」そう聞こえた。

「大丈夫ですか」『加害者』の声で我に返る。彼女が心配そうに覗き込んでいた。不吉な顔は何処にもない。さっきのは幻覚なのか。

「あの、すいません。そろそろ」彼女は何か言いたげな様子で、辺りをきょろきょろと見回す。そろそろ帰るのか、と私は察した。時計を探す。もう、四時前になろうとしていた。「あ、そう」と私はぼんやり返す。そんな曖昧な言葉を理解したのか、「では、すみません」と彼女は立ち上がり、笑ってこう言った。「早く、元の生活に戻れるといいですね」

ぷつん、と音が鳴った。この音は頭の中で響いたのだ、と遅れて理解した。仮面にひびが入る。私はとっさに金属バットを右手に持ち、『加害者』に向かって振り下ろした。彼女は口をぽかんと開けたまま、立ちつくしていた。

カキン、と金属音が鳴った。骨の折れた音ではない、と私は知っていた。事故に遭った瞬間、自分の骨の折れる音を、未だに覚えている。耳に一生こびりつくような、鈍い音だ。

体勢が悪かったのか、金属バットはベッドの縁を叩いたのだ。衝撃で右手が痺れる。一拍遅れて、『加害者』が悲鳴をあげた。私はその悲鳴を掻き消すように「なんでだよ！」と腹の底から、怒鳴った。

「何で私なんだよ。おかしいだろ。そりゃあ、アスリートでもなければ何の取り柄もないよ。だからって、こんな目に遭っていいはずないだろ！」涙腺が決壊したかのように、涙が溢れ、視界が滲む。「お前のせいだよ。お前のせいで、私は歪んだまま生きるんだよ！」

私は上半身を起こし、がむしゃらに両手を使って器具を外した。本田の作業を毎日見ているので、難しくはなかった。そのまま体を捻り、ベッドの上から転げ落ちる。躊躇いはなかった。運が良かったのか、背中から落ちたので、息が一瞬詰まる程度の痛みで済んだ。私は這いつくばって、加害者に近づく。彼女は腰が抜けてしまっているのか、恐怖で顔を引き攣らせているだけで、動こうとはしなかった。左足を掴める距離まで、近づく。幸せになりたいんだろ？　私はバットを振りかざす。この距離なら外さない。金属バットを勢いよく叩きつける。ガキン、と音が病室に響いた。

私はいつものように、病室のベッドに寝そべっている。何の変わりもない景色だ。強いて違う点を挙げるなら、ベッドの縁がへこんでしまっている事と、三時になっても相模が訪れない事ぐらいだ。本当に、些細なことだ。

左足には何の変化もない。

「漆原さん、今の心境はどうですか」事の一部始終を聞いた本田が訊ねる。看護師の診察というよりも、記者によるインタビューを受けているような気分だった。「今まで溜めこんできたものを、全て爆発させて、スッキリしましたか？」

「全然そんな事ない。むしろ、今まで以上につらいよ」本当の事だった。体の中がモヤで満たされたような、捉えようのない倦怠感がある。それに、衣服が濡れてしまったと勘違いするほど、体の動きは鈍いし、また、動かす事自体、面倒にすら感じた。

「私さ、バットで殴る直前に考えてしまったんだよね」

「何をですか？」

「相手をこんな目に合わせてまで、私の人生を良くする価値があるんかなって」本田は黙って話を聞いている。「相手の不幸を背負って生きるんなんて、耐えられなかったんだ。その結果、皆に醜態を晒しただけ」私は自嘲する。ただ、癇癪を起こした未熟な子供の様に、脊髄反射で罵声を吐き続け、考えなしに暴れただけだ。あれから、相模とも『加害者』にも会っていない。彼らの

その後について気にはなったが、心配するほどではない。
「でも」本田が口を開く。「その価値はあったと思いますよ。自分がどん底に落ちて、周りに不幸を撒き散らすより、どうせ相手を不幸にするんだったら、自分ぐらい幸せにならないと、損ですよ」
私は相好を崩した。本田から飛び出た意見とは思えない。「本田さんって、案外ひどい事言うんだね」
「今更、知ったんですか？」と彼女は悪戯っぽく笑う。「人生はきっとそういうものですよ。相手を不幸にして、自分が幸せになって。自分が不幸になって、相手を幸せにする。ぐるぐるとこれの繰り返しですよ。お互い不幸なら、人生止まってしまいます」
「あなたって、本当に私より、年下？」
「それ、皆によく言われます」本田が笑顔ではぐらかす。その台詞よく聞くけどさ、本当に皆から言われてるの？　と私は疑ったが、口にはしなかった。彼女はこう言うに決まっている。「それも、よく言われます」
以前、相模が「人生はかざぐるまのようだ」と言っていた事を記憶から掘り起こす。私の人生は歪んでいる。それでも、まわることが出来るのだろうか。私は幸せになれるのだろうか。私は何をすればいいのだろうか。
私は窓の向こう側を見る。変わりのない青空が、心なしか広く、澄みきったように感じた。鳥のさえずりが空気を伝って、病室に届く。前髪を揺らす程度の心地よい風が肌を撫でた。

何か音がした。私はその方へ視線を移す。花瓶に挿してある、あのかざぐるまだ。「あ」と肺から勝手に息が漏れ、意識せずにそれを花瓶から持ち上げる。そして、私はじっと見つめた。本田が不思議そうに「何かあったんですか？」と訊ねてくる。

「いや、こんな見た目でも、まわるんだな、って」私は自然と笑みがこぼれた。彼女は怪訝そうな表情をしていたが、笑顔は良い事だと判断したのか、気にせずに、「それで、今日はどうします？」と言う。

「そうだね」声に快活さが戻ったような気がした。私はかざぐるまを元の位置に戻す。「とりあえず、歩けるようになろうか」

再び優しい風がそっと吹く。歪んだかざぐるまがそれを受け止め、ぎこちなく、不格好ながらも、からからとまわった。

知念　紘己（ちねん　ゆうき）／法文学部・総合社会システム学科二年次

小説部門佳作

マットの泉

東恩納るり

口を開けば妄言虚言。
いつだって本当のことを口には出さないのが彼女のスタンスだ。
教育熱心な両親の下、二十になる今の今まで厳しく育てられたからだろうか。いつもナナメにズレたユーモアでお茶を濁して犬歯を見せる。そうやって日常の喧騒をのらくらかわす。彼女と一緒にいるのは心地よかったたし、なにより楽しかった。
だから、私は彼女の数少ない友人になれた。
いつだって「ほんとう」を誤魔化すから、彼女の真意は感じ取りにくい。だからこそ、時折思い出したかのように言う独り言が重要なコミュニケーションツールと化してしまう。
でも、そんな重要事項さえも日常の冗談のついでに語られるから、結局注意して耳を傾ける人も少なくなった。

「ひどいなぁ」

そう呟いたのは確か、法文総合棟の七階だったと、思う。パノラマのような大きなガラス向こうに見えるのは、あふれる緑と図書館の頭頂部。秋が本腰入れてやってきて、生い茂るススキが目先でなだらかに波打つ、そんな時期だったと思う。

「校内の素敵な風景だと思うけど」

それをちらりと見て、私は大学ノートに目を戻す。私の方はといえば、レポートの作成で忙しかった。初めはノートに簡単な下書きをして、パソコンで文章を推敲するのが私の入学時からの癖だ。

「何に見える？」

「夏の終わりのキャンパス」

吐き捨てるように言って。私は参考資料をめくった。

「私、処刑台に見える」

数枚の紙が擦れる音と重なった声にペンを止めた。彼女は窓の向こうを見ている。

「ギロチンはないよ」

「違う。死刑囚が階段を上って、縄かけて待つ、アレ」

口角を上げ冗談めかすようにこちらを見てくる彼女に、私は無感情に手元へ視線を戻した。

その言葉をもう少し、深く考えればよかったのかもしれない。
いつもの自己破滅的な妄言だと、私は再びノートへと意識を戻した。私の文筆の出足が遅いせいで、ゼミの発表はそろそろ近い。

「デュシャンの『泉』だっけ、その物の本質を問い直した、現代美術の先駆け的なあれ」
気持ちよさそうな背伸びをした後、話は続いた。話題がころころ変わるのも会話に指示語が多いのも彼女のちょっとした癖だ。
彼女はまだ、窓の外を見ていたと、思う。
「さあ、私……、美術系はとってないから知らないけど」
ノートから目を離さずに言う。思いのほかぶっきらぼうに発声された言葉に自分自身がびっくりしていた。
彼女の返答に、ちょっとだけ、間があった。
気味が悪くて、なんとなく彼女のほうを向いてしまう。
彼女はゆっくりと視線を動かしていた。私もその先を追う。
窓の外、ハトがいた。心もとなく飛んでいる。次の瞬間、痛々しい音とともに窓にあたって体を崩した。
「あ、落ちる」
彼女が口に出す。気付くともう、ハトは窓の中からいなくなっていた。

なんとなく、気の毒に思った。
「空に見えたのかな、窓」
そう言ったのは私の方だ。
それで、彼女が何か嬉しそうな、驚いたような顔をしていたのを覚えている。
「体得したね、デュシャン」
にやにやして彼女が言った。
「なんか嫌だな、それ。意味わかんないし」
私も笑っていたと思う。

『愛していたのかも、本当は』

レシートがまき散らされた部屋で、そのフレーズで目が覚める。
現実はいつだって小説よりも奇なり。
お通夜の席を抜け、私は彼女の部屋で吐いた息を吸った。
青を基調としてコーディネイトされたその部屋は、床にまかれたレシートのせいで煩雑とした海を連想させた。気を抜いたら泣き出してしまいそうな、寂しい緊張感が充満した部屋。

レシートの裏に書かれた短い言葉の群れ。知らなかった彼女の新しい一面がこんな形で見つかるとは、夢にも思わなかった。

『愛していたのかも、本当は』

目に貼りついた文字は、簡単には剥がれない。手元のそれを拾い上げる。その言葉の「Who」も「Why」も「What」も、彼女の飛び立ってしまった今、探す当てなどなくなった。誰にも語らなかったその言葉の裏を見ると、近くのコンビニでカフェオレを買っていた。何気ない情報も、今はとても愛しい寂しさを連れてくる。

もし、あのビルが本当の処刑台であればどんなに良かっただろうか。

首の縄がうっかり絞まり損ねて、彼女を引き上げる時間を与えてくれたなら、どんなに。首にかかっていたのが蜘蛛の糸だったと、彼女に笑って、今も笑って、これからも笑って一緒にいられたろうに……！

——……それでも、彼女は飛び出した。

もう一枚、手に取る。

『好き、すき、スキ』

もう一枚、掴む。

『酒は飲んでも呑みたいな』

ついでにもう一枚。

『幸せですよ、なんだかんだで』

「だから、相手は誰だってんの……！」

絞殺の紐さえ拒絶した彼女の体は、アスファルトへと向かった。残される私に、一通のメールを遺して。

何気ない文章だったのは覚えている。確か、明日の天気。

〈さあ〉

一言だったと残っている。返事は〈ありがと〉。

何か、何か、何かがあれば。もっと手がかりが。もっと兆候が。

もっと彼女の、彼女からのアプローチさえあれば。

『も少し、いたいな。せめてあと三日』

先月付の購入履歴の後ろに書かれた言葉に緊張がはじけた。理不尽なリアルに憎しみが募る。

綺麗なレシートが、握る手の握力で折れてゆく。

「じゃあなんでいないの、今」

ぽつり。独り言。

あとはもう、目が熱くて覚えちゃいない。

「仲村渠さん、大丈夫？」

肩に触れた手で、泣きじゃくっていたことに気付いた。
握った紙の数枚が水でぼやけている。彼女の母、金城さんはいつも以上に疲れた顔で部屋の入口に立っていた。表の部屋では彼女の弟妹が忙しなく働いていた。自殺の通夜だからか単に友人も親族も少ないからか、通夜は小さく行われるらしい。
「それ、読んでたの？」
声を出すと変に震えそうで、私は小さく頷いた。金城さんは彼女に似た口角で笑う。
「私もよ」
きっと泣き疲れたのだろう。
私達はお互い疲れた顔のまま笑いあった。
「それね、ほとんどがラブレターみたいなのよ。気付いた？」
手元のそれを見て、私は頷く。
「浮いた話なんて聞いたことなかったけれど、あの子にも良い人、いたのね」
そうだ。
「私も、知りません」
何かが後頭部をわしづかみにしたような、錯覚。
彼女の交友関係は私が一番知っている。彼女の残した言葉を見れば見るほど、言い表しがたい何かが胸にチクチクくっついた。
そもそも彼女はゼミでも会話すら億劫がる人見知りだ。そんな彼女に好きな人がいたのなら、

相手に告白もしていないだろう。
「あの、すみませんお母さん。私……このレシート全部貰ってもいいですか？」
想定内の驚愕、とでも表現できそうな顔で彼女の母が私を見た。
少しの沈黙の後、頷いて「いいよ、私はもう全部読んだから」、そう言って私を暗くなった家路に促した。

確証はなかった。
でも、私には形式ばったお香立てで彼女を忘れることなどできそうもなかった。薄々理性的になった脳が、全ては自分の為だと警鐘を鳴らしていた。彼女の為という名の、私自身に必要な一種の儀式だということも、きっとどこかで感づいていたはずだった。そのすべてに封をして、気付かないふりを決め込んだ。
数多の問題を曖昧に内包しながら、私は探すことにした。彼女の死の理由と『愛し』た人を。私の力の及ぶ範囲で。
それだけが彼女にできる唯一の弔いだと、その時確かに信じていたかったのだ。

次の日、私は唯一の手がかりであるレシートに没頭した。私が発掘できたのは床に散乱してい

た百枚程度と、引き出しに詰め込まれていたもう百枚。さすがに毎日は集めていなかったらしく、日付も場所もばらばらだった。

金城さんによると、他にもごみ袋に大量の紙屑が捨ててあったらしいが、それにはカフェオレの中身がぶちまけられていてとても読めたものではなかったという。こんなことになるとは思わず、その朝にゴミとして出したらしい。

「読ませたくなかったのかな……」

せめて私は彼女が何を思って死んだのか知りたかった。好意の先の人物が誰なのか知りたかった。私は無事だった二百程度のレシートを丁寧に読んでいく。

思わず頬が緩む、恋慕の想いが書き連ねられたレシート。基本的に二言三言の少ない文字列で書かれているため、数のわりに読み進めるのはそれほど苦ではなかった。むしろ時折訪れる感傷が、私の涙腺を勝手にいじくり作業の邪魔をし続けた。

『二人で食べるワッフルはちょっと楽しみです』

「誰なんだろう、本当」

読み進めていくうちに抱いた疑問は「彼」のことだ。殆どの紙面が片思いの「彼」へ宛てた文章なのに、そもそも「彼」の姿が全く見えてこない。どこを探せど肝心の顔が見えてこないのである。それだけではない。背丈、体格、しぐさや癖、その他彼を「彼」と特徴づけるパーツが全く登場しない。まるで「彼」は漠然と存在する空気のように空白な存在で、だからこそ紙片は

「彼」の名前などちっとも教えてくれる気配がないのだった。

「ゼミの人?」

クリップにまとめたレシートを指ではじきながら、私は独り言を呟く。ゼミの半分は女性で、男性は五本の指より少ない。またゼミでも彼女は孤立しており、集まりにも全く参加する気配がなかったから、想い人がゼミにいるとは考えられなかった。何より、そんな相手がいれば私が気づかないわけがない。

そしてもう一つ、気になるのがあった。分けておいた数枚を人差し指で机に広げる。それは二百のレシートの中のたった数枚だったけど、彼女の死の一ヶ月前に書かれている紙片だ。それらは全て、書きなぐられている、と表現するのが相応しい荒々しい文字だった。

彼女と両親の仲がそれほど良くないのは知っていた。当の彼女がよく愚痴るのである。ただ、それも全て冗談交じりに面白おかしく話すから、たいていは暗い雰囲気よりも腹がよじれるほど笑ったのを記憶している。だからそれも、よくある親との確執だと考えていた。

けれどそれら紙片にのたうつようにあったのは、それまでのイメージを瓦解させてしまう、途方もない黒。

『いらない　いらんない』

『ざまをみろ』

『みんな死ねばいいんだ』

『やだ　やだ　やだ　やだ』
鈍い悲鳴。そんなものが聞こえてきそうな文字に頭を抱える。
「ちゃんと相談してくれれば良かったのに……」
後悔も祭りの後には意味をなさない。ため息ひとつは吐き出して、残りの紙片へ意識を向ける。
分類しかねたのが、あとの二つだ。
『きづ　いてしま　った　んだと　　おもう』
『行ってきます、もう』
そこもやはり曖昧で、彼女が示す先がわからない。ただ、この二つは彼女の命日にかなり近い日付だった。特に後者の日付は、彼女の自殺の五日前。
気付いてしまった「何か」が、自殺へのトリガーだったと考えるのは安直だろうが、遺書らしきものがない今、そうとしか考えられない現実もある。
だが先行き不安な一方で、一種の希望も確かにあった。彼女の気付いた「何か」が見えない「彼」を知る手掛かりになるような気がしていた。多分これが、女の勘というやつだろう。

『愛していたのかも、本当は』
数ある紙片の中でも特に気に入っている一枚を手に取る。
最も彼女に近しい日付のレシート。飛び降りの前日に買ったコーヒーはどんな味だろう。おそ

らく、このカフェオレの余りをごみ袋にぶちまけたのだろうが、そもそも彼女はコーヒーの匂いも味も苦手なはずだ。なぜ彼女がそんなものを買ったのか知らない。だが、飲んだ後に顔をしかめてそのまま捨てる様子は容易に想像できた。

苦手なら買わなきゃいいのに。私はその紙を一番目に付くところへやって、暗くなる前に夕飯の買い物に向かうことにした。

夕飯は特に食欲もないのでインスタントで済ませることにした。日ごろ気になっていた生麺タイプを味噌か醤油で悩んで、結局味噌にする。味噌はバター乗せが美味しいと聞いたので、この機会に挑戦してみたい。

夕方のスーパーはそれだけで主婦の戦場だ。本格的に混みだす前に、私は出来合いのサラダとノンアルコールカクテルをかごに放り清算へと急いだ。レジ前。小さな冷凍ケースで冷やされている缶コーヒーを見つけ、少し悩んだ後それもかごに入れておいた。ブラック無糖。

「四七二円になりまぁす」

間の抜けた声に小銭を出して自宅へ。夕曇りの空はもう少しで青みがかる頃だろう。家々のシルエットが黒のベタ塗りにかわる頃、ちらほらと目に入るアパートや公民館の縦長のシルエットが誰かの墓標に見えた。心持、ざわざわとして私は急ぎ足でアパートを目指した。

その後は特に収穫もなし。難解なレシートに嫌気がさしてコーヒーを飲んでみたが、ブラック無糖なんて今まで飲んだこともなかったから、吐き気を催す苦汁が喉から流し込まれただけだった。先のハイカロリー・ラーメンも相まって、腹部の健康状態は相乗効果で悪くなる。ノンアルコール・カクテルとコーヒーを冷蔵庫に片づけ、入れ替わりに水を出した。それを飲みながら、やはり人体に必要なのは水であると悟った。

翌日。大学図書館で資料をあさる。

彼女のことも頭を離れなかったが、生者には等しく課される義務がある。ゼミのレポートもそのうちの一つだ。

正直時間が惜しかった。だからこそさっさとレポートを終わらせて、レシート遺書の解読に時間を割こうと思った。

レシートとレポートって語感が似てる。

そう思考が脱線したのはノートが大方書きあがってからだ。これをパソコンに起こせば悪くないレポートが出来上がる。だが、結論が地味だ。何か良い、所謂殺し文句はないものかとペンをふらつかせていた時だ。

（ざまをみろ）

昨日、幾度となく読んだフレーズを、何の気もなしにノートの空きに書きだしていた。

「ざまをみろ、か。『ざまあ』とか『ざまーみろ』じゃないんだ」

場所が場所なだけ、小さく呟く。彼女の性格ならこの言葉の後に顔文字でも書き足していそうなものである。

（みんな死ねばいいんだ）

この「みんな」には私も入っているのだろうか。書き足したノートの落書きにそう空想する。そもそも誰に向けて発声されたのかが分からない以上、あらゆる問いも可能性を広げるだけで無意味である。

あとはなにがあったっけ。見すぎた文字は浮かんでは消え、その膨大さに書き出す気も失せた。ああそうだ、あと印象的だったのは。

『愛していたのかも、本当は』

それをノートに書き込もうとして、やめた。

中学以来、テレビのアーティストにしかそんな感情を抱かなかった私にとって、「愛」という表現はストレートすぎた。端的に言うと、気恥ずかしかった。

問題は、先に書いた二つのフレーズ。私はこの二つを、どこかで聞いたことがある。確か、何

かの文学。講義で取り扱ったか資料で参考にしたか。どっちだっけ。

「大田洋子ですか」

予期せぬタイミングに体がはねた。振り向くと、去年お世話になった非常勤の教授がそこに立っていた。教授はノートに書いていた私の文字を見ていたようだ。彼は、二言三言彼女についての世間話をした後。

「いいですね。自主学習ですか？」

と、付け足した。どこか申し訳なく、私は視線を泳がせる。

「あの、すみません……自主学習ではないです」

それと、大田洋子、って誰でしたっけ。

率直な疑問を続けると、教授は驚いたように簡単な紹介をしてくれた。大田洋子、広島の原爆作家で代表的な作品は『屍の街』。

そのタイトルを聞いて、私はしまったと気付く。その作品は去年、彼の授業で受けたものだ。それを忘れていたとは失敗である。ちなみに、このフレーズ自体は「半放浪」のものだそうで、そちらは知らなかったから少しほっとした。

大田は原爆の体験から、早くに水爆実験の反対をしていた。だが彼女が活動していた時、その声は誰にも聞き入れられず、ある事件が起きてしまう。第五福竜丸事件と汚染マグロ。大衆が遅すぎる原爆反対の旗を掲げる頃、大田は一人その波から立ち去ったのだそうだ。

お礼を言うと、教授から「去年やりましたよね」と釘を刺されてしまった。この作家を担当していたのは後輩だったので、私の記憶が曖昧なのも仕方ないと思う。

教授はついでに、もう一つのフレーズについても教えてくれた。「みんな死ねばいいんだ」は同名の詩があると言う。こちらも同じく原爆の詩で、正田篠枝の『耳鳴り』という詩集のもの。二つとも同じ後輩が大田のレポートの引用として使っていたという。

しかし彼女は去年この講義には出ていないはずだ。だから後輩が『屍の街』の引用として使ったこの二作も知るはずがない。そしてあまりに普遍的なこの二つの言葉は、その凡庸性から彼女の死とは無関係だとも言い切れる。

「お勉強、頑張ってください」

この言葉の出所であるレシートの存在を知らない教授は、軽やかな表情でそれだけ言い残して去って行った。私の方も思わぬ進展に、彼の背中に一礼して自室へ帰る支度を始めた。

最初の頃より難解なレシートが身近に見える、車内。エンジンをかけてクーラーをつければ、少し気が休まった。

それでもわからないことの方が多い。キーワードは無差別に増えた。

家庭の不和、捨てた紙片、大田洋子、原爆、汚染マグロ、正田篠枝の詩、第五福竜丸事件と反原爆運動…。

断片的でまとまりのない情報ばかりで頭が痛くなる。いや、もとよりまとまりなんてないのか

もしれない。

そもそも、捜査を辞退するきっかけは最初の作業でかなぐり捨てた。彼女の死の動機を探れば必ず想い人へと繋がる。一度始めた行為を、中途半端に投げ出したくはなかった。

だけれど、もし仮に彼女の死の真相がわかったとしてどうなるというのだろう。もしその「彼」を見つけたとして私はどうすればいいのだろう。

当の「彼」にしてみれば、すでに故人の女学生――しかも見知らぬ相手――からの想いを人づてに告げられても困惑するだけで終わりじゃないか。

結局、私のしていることは、身勝手な自己満足でしかないのだろうか。私に告げなかった秘密を、親友という立場を悪用して彼女の近辺を物見遊山でほじくり回す。そんな悪趣味な押し付けがましい慈善事業ではないのか。

考えていると胃がキリキリ痛んだ。最近偏食気味だったせいか、ひどく腹の虫の居所が悪い。私はアクセルを踏み込み、運転に集中する。これ以上ネガティブな妄想を繰り広げても、無意味なだけだったからだ。

それから、二日後。ゼミに出る気になれなくて、私は初めて無断欠席をした。発表は来週だから、多分大丈夫だと自分に言い聞かせておく。

行くあてもなく、法文総合棟の七階へ向かう。時間がかかるように事務室側の階段で登って行った。軽やかな音とともに降り立ったそこには、木のベンチがぽつん。机がない代わり、読書スペースや休憩にはもってこいの場所である。いつも通り人影はなく貸切状態だった。

思えば、彼女はこういった「誰もいない場所」を見つけるのがうまかった。人見知りの彼女は少しの人混みさえ嫌がるので、ふらりと私と友人達のグループからいなくなってはこういう穴場の場所を転々としながら校内を歩き回る。その中で教えてもらった場所の一つだった。

そこからエレベータ前の学習スペースへ向かう。こちらも珍しく人影はなかったが、場所取りのカバンが机の上に横たえてあった。持ち主はおそらく、トイレかどこかだろう。

長居する気もなく、なんとなく感傷に促されるまま窓ガラスを覗く。眼下に見える光景を眺めていると、目頭がじぃんと熱くなった。

そうだ、あの子と最後に会話らしい会話をしたのはここだった。なぜ忘れていたのだろう。日常のせわしさに忘れていた断片が、ひそかに命を持ってざわめきだした。

最後に彼女は、何を言っていたっけ。何か、とてもビビッドなイメージを。確か、白い鳩。そうだ確か！

「デュシャンの、『泉』……」

その言葉は潤滑油のように、私と彼女の残した世界を動かし始めた。

デュシャンの「泉」。大学図書館で検索をかけても専門書しか見つからなかったため、私は地元図書館まで車を走らせた。平日の午後、人影はまばらで、近所の学生もまだ来てはいないようだ。私は2冊現代美術の入門書を借りた。

「返却日は二七日です」

気がせく私に、やわらかい顔をした女性の司書がその二冊を手渡す。受け取るや否や私は早足で車に向かって片道十分の帰路を急いだ。

マルセル・デュシャン。アメリカで活躍した芸術家。

芸術というもの、そのものに疑問を投げかけた彼は早くから「芸術を捨てた芸術家」ともてはやされたらしい。彼女お気に入りの「泉」は元々の題が「噴水」であり、リチャード・マットという偽名で美術館に送り付けられた。それは、男子用小便器に製作者の署名が書かれただけの作品で、後にその署名の名も便器会社の名前だと判明する。それがレディ・メイドという芸術の一ジャンルにまでなってしまうのだから、やはり芸術はわからない。美術が万年2か3の者にはわからない世界がそこにあるのだろう。

それよりもだ。ダダイズム、コンセプチュアルアート、「泉」に「花嫁」……。聞きなれない単語や作品の羅列に、私は頭を抱える。これが彼女の死に繋がるとは到底考えられなかった。

結局、ドツボだ。

あまりに抽象的すぎる遺書や遺言は、それを表現する素材が存在しないとでも言うように世間から切り離されていた。端的に言うなら、わけが分からない。もうお手上げだ。
彼女を知ろうとすればするほど、彼女の残した痕跡は難解なパズルのように新たな意味を示すだけ。
結局、意味のない行為だったのだろうか。私の、この彼女の死を探す行為に、何の意味もないのであろうか。全ては無駄で、彼女はただ死ぬために死んだのか。
悔しさがぐっと滲む。
それでも諦めきれない何かに押され、私はデュシャンについてまとめてある美術系のサイトをあさり出した。
本が悪いのかもしれない。彼女にとって需要だったのは、「泉」ではなくデュシャンそのものの生き方だったのかも。
苦し紛れの私の足掻きを、脳裏の彼女が笑った気がした。

いつの間にか、夢をみていた。夢だと気付いている夢だ。
飛び込み台に、立つ彼女。衣服は、お気に入りの青ボーダーの七分と、「琉球のアオ」を表現していると言った、お気に入りのガラスのネックレス。
飛び込み台だ、と思ったそこは、私と彼女の間に白線を引いている。私はぼうっとして動けな

い。
彼女が笑って言った。確か、今の天気の話。
恐ろしいほどの晴天だったと思う。
まるで、海がそのまま周囲を覆ったかのような、雲さえ呑まれる荘厳な青海。神々しいほど素敵な景色は、一種の畏怖を伴って私に警告する。これ以上の深入りは無用だと。

もう帰ろうよ。
うん、じゃあもう少し見てから。

白線の向こうで彼女が微笑む。
何故、手を伸ばさなかったのだろうか。
無理やりにでも、引き寄せて、こちらへ。
寝起きのように愚鈍な脳は、彼女の世界を恐怖しながらも求めていた。ゆっくりと、視界が青でけむる。潮の香りが鼻につく。
もう帰ろうよ、ねえ。
うん、もう少し、もう少しだから。

このままではいけない気がしたのだ。
片栗粉が空間にそのまま混ぜられているような、空気の流れが穏やかになった世界で、私は彼女の方だけを見ていた。
彼女は幻想的だった。ひらひら泳いできた魚の一匹をぱっと掴んで、それをおいしそうに食べていた。サクサクと軽やかな音を出して、彼女の口からこぼれたくずは粉糖になる。
赤い舌でぺろりと唇の砂糖を舐める彼女。瑞々しい唇はあの魚を食べたせいだろう。きっとあの魚を、みんなが食べたいのに食べることは出来ないのだ。きっと理性が邪魔をして——……。

もう帰ろうってば、ねえ!

強く呼んだ声にも、彼女はあの魅力的な声で囀る。くすくすと、鈴が揺れるような笑い声で、白線の向こうで私を笑う。
恐怖で私はどうにかなりそうだった。何でもいい。早く帰りたい。

ほんとうは、わたし——

それは、言ってはならない言葉だった。彼女のやさしい頬が、柔和にゆがむ。私の罪をせがむ

かのように。

ほんとうは、わたしと、帰る気なんてないんでしょう

語ろうとして遮った本音を誤魔化すための嘘は、空間に強く響いた。
はっとする直後、彼女の世界は大きくぐらつく。ナイアガラのように周囲からあふれ出してくる濁流が地響きをおこし、彼女の体はその飛び込み台でバランスを崩した。

うん、大当たり！

最後に、唇が残した音はとうとう聞き取れなかった。
最後の最後まで、見抜かれていたのは私の方だった。
それでも私は。私は、言えなかったのだ。

はっと、気付いた。

目をこする。最近は活字ばかりを読んでいたからか頭が痛い。

目覚めの悪い夢を見たものだ。彼女の「大当たり！」がまだ耳朶に残っているような気がして、私は頭を振る。私は、あのとき何故言おうとしたのだろう。考えすぎたのだ。だから、あんな夢をみた。

まとまりのないレシートの墓場を見る。その沢山の情報は、彼女の残した遺書のはずだった。それが色をなくしていくように思える。

「なんで死んじゃったの」

返答のない問いかけは、結局独り言にしかなりえない。

こんなにも熱い恋をしたのなら、どうして。取り残されたものに、なぜ何も教えてくれないのだろう。

そんな義務がないのは知っている。だけれど、教えてくれたっていいはずだ。私は友達だった。確かに大切な人だった。親友だった。それなのに、この感情は私の独りよがりだったのだろうか。

「これも、意味はないの？」

ふつふつと涙が、こぼれていた。

何故、あの夢の彼女にさえ手を伸ばせなかったのだろう。今思えば、彼女と私の間にひかれた白線がすべてを物語っていたような気がした。

彼女が青に飛び降りるのは自明の約束事だ。それなら私が彼女の手を引けたはずなのだ。最も彼女と親しかった、私なら。私だったなら。

「もうわかんないよ、何が当たりなの。ねえ……」

レシートは本来の精算履歴へと意味を喪失していった。この文字列に意味がないなら私の作業も無駄だったのだろうか。

遺書も残さず。悩みも言わず。悩みの渦中に身を置いたまま一人さびしく飛び降りることが彼女の選択だったとでもいうのか。

私は、彼女にとって相談するにも値しない。結局私たちは赤の他人でしかなかったのだろうか。

「ねえ、なんで死んじゃったの……」

——ピーーッ！ピーーッ！

「！」

携帯が鳴った。不意打ちのメールに、意識が現実へと帰還させられる。涙目をこすりながら画面を見ると、開きっぱなしだったウェブサイトの上に新着情報として文面が流れていた。「お得！会員様情報！」という見出しのそれで何かが冷めていく。

「……はあ」

ため息。日常も世界も私の事情なんて考えなしだ。空しさがつのって、サイトごと表示を消そうとした。

ふと、居眠り前に読み逃した一文に目が行く。サイトの最下層、デュシャンの墓碑に刻まれたという言葉だ。

『死ぬのはいつも他人ばかり』

すっと染み入ってくるような、その言葉に、私はおもむろにサイトを閉じた。何かがまた緩やかに動き出す。もう一度だ、まだ彼女の意思を読み取れる。
(うん、大当たり!
体得したね、デュシャン)
あの彼女の唇が、耳元で囁いている気がした。
私はその言葉を検索にかける。答えはきっと、これだったのだ。

彼女の母に連絡すると、快く部屋に上げてくれた。部屋の片づけをしようとしても、どうしても出来ないらしい。
だから彼女の部屋は、あの日のままだった。
すうと息をすると、彼女の居住していた空間が私の体内へと入ってくるような気がする。一人にしてほしい、と伝えたら「じゃあ、ちょっとお茶の用意をするわね」と言って彼女の母は出て行った。
一人ぼっちの室内——。

何を、語ればいいのだろう。それをする為にもう一度この部屋に来たはずなのに、喉が渇いてうまく話せる自信がない。気を抜いたらまた泣き出してしまいそうな奇妙な緊張感が、あの日と同じように張りつめていた。

「久しぶり、だね」

部屋の中心に向かい、立つ。ぽつりとつぶやくと、どこか部屋の無音が強調されるようだった。それが嫌で、すぐに言葉を紡ぐ。

「私もね、なんか……わかったんだと思う」

できるだけ、彼女に近い言葉で。彼女につながる言葉で。彼女の世界につながる言葉で。

「私もね、愛していたんだと思うよ、ほんとうは」

発声してしまった言葉は私の意味を待ち渦を巻く。何かに惹かれるようにして、私の喉からその言葉があらわれていく。

「私もね、あなたを愛していたんだと思う。あなたのね、言葉も、人柄も、何もかも、きっと」

それを「友愛的に」か「性愛的に」かは、私にはまだわからない。それはこの曖昧なままでいいのだと思った。今更に意味を付与してなんになる。意味付けを、彼女は嫌った。だから遺書は必要なかった。彼女はきっと死ぬために飛び降りたのではないのだ。

「だからこそね、なんの相談もなく死んじゃったあなたが許せなかった。好きな人がいるって知っ

て、嫌だった。私が知らない人が居たなんて、多分、嫉妬してた」
一人呟く言葉は、あの日に封をした本心だ。気付いてはいけなかった、気付くはずはなかった私のほんとうだ。

「でもさ、あなた本当は、死ぬつもりなんてなかったんでしょう」
持ってきていた大量の紙片に視線を落とす。これは元々、彼女の部屋に撒かれていた紙屑だ。彼女が彼女の世界を表現した言葉の波。きっと最初、この部屋は海そのものだったんだと思う。あの日の私が、それに気付けなかっただけだ。
真っ青な部屋で、白波のようなレシートの群れ。白く細かなそれは、きっと彼女の海を用意するのに適任だっただろう。だから、このレシートは部屋に撒く波として選ばれた。
そうなると、詩の意味は結局私の後付けだ。
寄せて返す波に意味などは存在しない。
ラブレターも恨み言も、結局私がそう読んだだけにすぎないのかもしれない。彼女の答え合わせがない限り、この問答合戦は終われないのだ。
結局、どんなことも後の祭り。事前になんて知るよしもないのだ。誰がどんなことを思っていようと、どんなことを叫んでいようとわからない。全てが終わって、しまったと気付く。
「でもね」
彼女は魚を食べてしまった。この世界より、あの海を選んだ。

バランスを崩したのか身を投げたのかは知らない。どちらも結果は同じだ。彼女は水没した。いや、正しくは潜水したのだ。その海を用意して、そこに自ら飛び込んだ。例えその結果が死ぬことになるとわかっていても、彼女はそれを選択した。

「死んじゃったんだね。ほんとうに」

空虚な部屋の中、無機質な机が黒光りしている。レシートのない部屋は綺麗に凪いでいた。一仕事を終えたように、私は長い息を吐き机に腰掛ける。卓上の本棚、その一番目に付くところ。一番手に届きやすい場所に私が借りたのと同じ現代美術の本があった。

「これか、デュシャン」

小さく笑って、それに伸ばしかけた手を止めた。

何かに手首を掴まれたかのような、錯覚。

その本の隣へと手が勝手に軌道をずらす。文庫本サイズのステンドグラスの写真集に手が触れた。躊躇いながらもそれを手に取ると、中に小さな紙が挟まっていた。

ページは青いステンドグラスの写真。下に、「シャガール」という名前と制作年が書いてある。

「シャガールブルー……」

呟いて、その紙を開く。ときときと、心臓の音を聞きながら、私は白い付箋のアオインキを追った。

『好きなもの　あお　寝床　クッキー　桐島　以上』
「きりしま？」
知らない名前だった。顔を上げると今度ははっきりと、1冊のファイルに意識がいく。まるで招かれるようにそのファイルを取ると、中には「創作」と書かれたノートが隠されていた。
「なにこれ」
そこには見慣れない小説が汚い字で書いてあった。彼女が詩作するのは知っていたが、小説を書いていたとは知らなかった。薄汚れた表紙を見ると、「創作」の文字の下の方に小さく「五年一組」と書いてある。
作品の内容は、どちらかというとファンタジーだ。
桐島という名前の鬼の子が成長する話。思いついた時に少しずつ書き足していたのだろう。文体や字が話が進むごとに上手くなっているように思えた。
彼女の成長とともに進行する物語。この小説は、その完結しない点において奇妙だった。目的もなければ明確なゴールもない。まさしく、この本が「桐島」と呼ばれる鬼の子の歩んだ人生、そのものだった。
鬼の子と人の子の違いはただ一つ。
人の目に見えるか見えないか。

本来は見えないはずの鬼の子を、女の子が見つける場面から物語は始まっていく。そして、彼女が彼と歩む日常を小説は紡いでゆく。夏祭り、誕生日、卒業式と入学式、大切な人との別離――様々な出来事が、二人を襲う。それでも二人は共にいた。
そして、最終話。彼女は深い海に一人潜水し、鬼の子が一人この世界に取り残される。鬼の子は別れも告げられず、そばに居たのに何もできず、ただ茫然と見守るしかなかった。生きてほしかったから、彼女は鬼の子を置いて深海へ出たのだ。
日付は、自殺の前夜。
緊張をほぐすように、長い長い溜息をついた。

「ごめんなさいね、ちょっと遅くなっちゃったわ」
ふと、彼女の母が入ってきた。紅茶が透明な香りを部屋に上書きする。私の手元の本を見て。
「ああ、それね。昔はよく書いてたみたいだけど最近は見てないわね。何か、書いてあった？」
「いいえ、何も――」
咄嗟に私は嘘をついた。
彼女はこの作品を自分の母には見せなかったのだ。だから、この人は「良い人」がいるとは知らなかった。その理由を理解するのは、このノートを見た後はさほど難しい作業ではなかった。
「レシート、何か分かった？」
私は首を横に振る。ノートを閉じ棚に戻しながらお茶を頂く。金城さんが話す思い出話は、私

の耳をそのまま通り抜けた。懐かしいとされた思い出が空しかった。彼女が逃れたかった思い出が、切なかった。

私はもはや何も答えられず、頷くだけ。それを金城さんは都合よく解釈してくれて、「お互い早く立ち直りましょうね」と笑いかけてくれた。

その日、私は「忘れ物を取りたい」と嘘をついてそのノートを持ち出した。盗んだ、と表現してもいいだろう。だが、あれはあそこにあるべきものではないと思ったのだ。

帰り際、金城さんが「良かったら」と彼女の形見に「琉球アオ」のガラスのネックレスを渡してくれた。陽光を取り込みガラスは蒼くキラキラと光を反射させる。私は彼女の母に一礼すると、そのまま車を海へと走らせた。途中、赤信号で止まったすきにネックレスを首にかけた。やることは、決まっていた。

昼過ぎ。平安座の海は平日なこともあってか、人影はまばらだ。その中でも、穴場と言えば穴場の、人の少ない海岸へと車を走らせる。案の定人はおらず、私は路駐して白い海岸へと降り立った。

スニーカーの裏で砂が擦れる。私は千切ったレシートを握り、海へと向かう。海水に彼女の言葉を流し、潜水した彼女のもとへと送るためだ。

波打ち際で止まるはずの足は勝手に海へと向かう。ざぶざぶと波をかき分け、ゆっくり足、膝、腰、と沈んでいった。

波はなだらかで、腹まで浸かった私はそこで大きく振りかぶり、海面にその紙をぶちまけた。水を吸って沈んでゆく紙屑。それが上手く彼女のもとへと沈めるように、私は水をバシャバシャやった。何度も何度も水をかき回し、沖へ沖へと手を漕いだ。

私の周りで海水がうねり、紙屑が向こうへと押し流されてゆく。

私はまだそちらへいけないから、せめて彼女の残した世界をあちらへ送りたい。泣きながら、彼女の名前を呼んだ。水をかき分け、紙を贈った。それが精一杯の、生者からの餞だった。

海から上がる頃には、かなり時間がたっていた。もう全身ずぶ濡れだ。元々海水に入るのは予定してなかったから、車に海水が滲みないようにするのが一苦労だった。もう、帰ろう。エンジンをふかして駆け抜けたのは、清々しい、青空の続く海中道路であった。

末筆に、奇妙な体験を綴っておきたいと思う。

家に帰って風呂上り。私は最後に、捨てきれなかった二枚の紙切れと、あのノートを見ていた。

『愛していたのかも、本当は』

『好きなもの　ああ　寝床　クッキー　桐島　以上』

多分、この二枚は永遠に私の手元に残しておくだろう。彼女を思い出すときにこれを眺め、また新たな意味を付与してしまう前にタンスの中へしまうだろう。何気なく、「創作」のノートを広げた。

「あれ？」

ぱらぱらめくってノートの最期。鬼の子が一人残され永劫を生きるというラストシーンに、先程は見られなかった一文が書き加えられていた。

『いやだ』

平仮名で曲がりくねるように、怨嗟と悲しみと、途方もない愛情が込められているような。様々な感情がない交ぜになったまま書かれたような筆圧の文字に、私は胸がさわさわした。

私の右手には、まだあの写真集へと手首を引いた何者かの感触が残っている。もしかしたら—と、私は考えた。

もしかしたら、あの時確かに桐島は居たのかもしれない。彼は、目には見えないから、私の独白を聞いていて、一緒にあの海まで行ったのかもしれない。私が夢中でバシャバシャやっているときに、彼もまた何かを思っていたのかもしれない。

『いやだ』

私のものとも、彼女のものとも違う、吐き出されるようなその三言が、私の目に焼き付いた。もう、このノートから奇妙な緊張感は感じられなかった。

文字を、指でなぞる。

多分、あの海だ。きっと彼もまた、あの海で彼女の元へと潜水を果たしたのだろう。確信はないが、そんな気がした。

今思い返せば、私の悟ったここまでの全ては、彼が案内していたような気さえした。彼が私に彼女の死を記憶させるために用意した、そう仕組まれた物語のようにも感じた。

何か言いたい。彼に何か伝えたくて、唇がもごもごする。

でも彼の名前がわからない。

「あの子をよろしくね、桐島さん」

仕方なしにそう呟いた。

私はまだ行けないその海底に彼女と桐島が待っている。

それなら、彼女が生きられなかった半生を、私がそこへ行ったときに聞かせてやろう。その時に改めて桐島さんに紹介してもらおう。

私はもう一度、ノートを始めから読み直した。

つけっぱなしのテレビが伝える天気予報。

今週中はどうも晴れ間が続くそうだ。

東恩納るり（ひがしおんな　るり）／法文学部・国際言語文化学科四年次

詩部門

詩部門受賞作

プロテウス

東恩納るり

海の中の洞窟で
あなたと一緒に退行進化　してみたい

携帯も　ネットも　連絡先も
お菓子も　ノートも　鉛筆も
財布も　貯金も　カードも
車も　ペットも　ごはんも
視力も　筋力も　発声も

必要な最低限以外　全部おいてって
ううん　あえていうなら
おふとんと　まくらと　あなたと　空想
それと一番だいじな　ビロウドみたいな水をもって
生きるのには酷な　その洞窟で

ゆらゆらいっしょに　退行進化　しちゃいたい

そしたらねぇ　きっと
生きるのに大切なものは何かってわかるわ
きっとねぇ　生きるのと同じくらい
死ぬことが大切だって思えるようになるわ
欲しがる気持ちと同じくらい
失う気持ちの大きさに気づくわ
そうして　ぜんぶ　わかったら　ねぇ
あなたにも
深海の底の色がわかるわ
そうしてね　それがおそらと同じ色だって思えるわ

まぶたのうらにいる宇宙が　それとおんなじくらい
大きいものだったって気づくわ

まっくろじゃないそこは
きれいな宝石よりも
アリスのドレスよりも
シャガールさんのお仕事よりも
島の空が　見たような
ずっときれいなあおいろだって気づけるわ

生きるのに本当に大切なものだけもってってって
生きるのが本当にむつかしいそこで
あなたとゆらゆら　退行進化　していたい
きっと
そのとほうもない　すてきなあおにかこまれて
私のまわりの全てをあいして
そして　そのさいごには
進化の最先端までまきもどって

あなたとそこで眠りたい

東恩納るり（ひがしおんな　るり）／法文学部・国際言語文化学科四年次

詩部門佳作

かいわ

こはぐら

暗闇の中　流れる時間は　ただ孤独に　冷蔵庫の音　こだまする
静寂の中　ささやく声は　ひっそりと　砂に塗れて　滴り落ちる
ああ　運命(さだめ)の日が近づいてきた
お嬢さん　明日は我が実　わかるカイ？

明日は我が身　そう言いたいの？

これは失礼　お嬢さん
それにしても　ちょいと塩が。。。

砂を落としてきれいにしましょ

いやいや　お嬢さん
今カイもだ　度が過ぎる
わかるカイ？

あら　もしかして　減塩派？
そうね　わかるわ　わたしもよ

わかってないな　お嬢さん
君はなにも　わかっちゃいない
何カイ目だ　度が過ぎる
いカイ　いやいや　遺憾だ

反省してるわ　気をつける
お嬢さん　明日は我が実　わかるカイ？

明日は我が身　ね　また明日
陽ざしの下で　逢いましょう

運命(さだめ)の朝が　やってきた
左に新聞　右には茶碗
鼻歌うたう
嬉々貝貝　嬉々貝貝
朝の一杯　あさりをいっぱい
きのうの彼はどれかしら
塩加減は　いかがかい
嬉々貝貝　嬉々貝貝

一面飾るは　あのニュース
反省してる　気をつける
奇奇怪怪　奇奇怪怪

今回もだ　度が過ぎる
何回目だ　度が過ぎる
奇奇怪怪　奇奇怪怪

【ジャリ　ジャリリ】
【ジャリ　ジャリリ】

暗闇の中　嫌に響く　砂利の音
砂は落とした　はずなのに・・・

【ジャリ　ジャリリ】
【ジャリ　ジャリリ】

奥歯に砂を置いたまま
私は今日も　家を出る
いつものようで　いつもでない
かかる奥歯　ざわつく心

【ジャリ　ジャリリ】
【ジャリ　ジャリリ】

オジョウサン　アスハ　ワガミ　ワカルカイ?

こはぐら（こはぐら）／教育学研究科・修士二年次

詩部門佳作

ティクターリクの夢

添田　晴日

ある日魚は頭をもたげ
もう一つ世界があることに気づいた

厳しく乾いた新たな世界
そこに待つのはいかなるものか
身を乗り出して這い上がろうとしてみたが
鰭の力はおぼつかず
むなしく泥を探るばかり

所詮魚は魚であって

水から離れることはできない
新たな世界は手に入れられぬ
ティクターリクは抱いた夢を
泥濘の底に打ち捨てた
それからひとつため息をついて
元の淀みに戻っていった

魚の夢は夢に終わったが
なべて我々四足動物(テトラポーダ)
這いずり歩きまた飛ぶものは
デボン紀のぬかるみの底
あの日あの時一匹の魚
ティクターリクが見た夢なのだ

生きとし生けるものみな夢を見る
ティクターリクが滅びた後も
彼らが夢見た大地の上で
様々な生き物が夢を見た

セームリアのエリオプスの
ミクロラプトルのモルガヌコドンの
無数の死者の見た夢の中
今我々が見ている夢を
いつかどこかで受け取る誰かは
いかなる夢を見るのだろうか

添田　晴日（そえだ　はるひ）／理工学研究科・修士二年次

詩部門佳作

雨

長島　瑠

知っている？
声って傘の下が一番美しく聞こえるのよ。
だから私、
雨の日しか声を出さないの。
だって私、
あの人には私の一番美しい、
一番綺麗な声を
聞いてほしいんだもの。

おかしくなったなんて私のともだちは言うけれど
そんなこと、ないのよ。
だって私、
なかないとあの人に振り向いてさえもらえないんだもの。
だから今日も
雨を待つのよ。
あの人の黒い、大きな傘が開くのを
待っているのよ。

長島　瑠（ながしま　るり）／教育学部・学校教育教員養成課程四年次

詩部門佳作

チニカエレヨ

蓬田　匡

職業精子製造業
友達づきあい接待に
試験に仕事に団欒に
疲れて心に壁造る
造り続けて十数年
私は立派な壁職人

家に戻ってパソコン開き
箱に入って便器にすわる
淫靡で卑猥なねーちゃんの

分け隔てがない微笑みに
手淫で子種を撒き散らし
心の穴を補修する

トンテンカンカントンテンカン

にーまるいちいちさんいちいち
大きな震災ありました
地震に津波に放射能

いちごーはちないちお亡くなり
にーなななはちゆくえふめい

それでも私は生きている
私はゲームの主人公
モブキャラどんどん消えてって
構わず進めるストーリー
だって私にかんけーないもん

パッと開いたステータス
いつのまにか状態異常

今日も得意の穴補修
死ぬまで得意の穴補修

トンテンカンカントンテンカン

私はゲームの主人公
なのにどうして私は凡才で
人に埋もれて息苦しい？
どんどん上に降り積もる
醜い下への優越感と
無様な上への劣等感
私は地球の主人公
どうして私はスターじゃない？

花屋を彩る花達が　綺麗なのも頷ける
配達前に選別されて　誰にも見られず燃やされる
救われざる醜き花よ　来世はきっと美しく
救われなかった醜い花よ　残念だったね

ひよこが選別師に訴える　私は他のひよこと変わらないけど
それでも輝けます　と

一人一人が主役ですという言葉とともに
生きたままシュレッダーにかけられるのです

シュッシュパシュパシュッパッパー

私がなくても世界は困らず迷わず止まらない

クルクルクルリンクルクルリ

まだいかないで宇宙船

地球号よ私を乗せて

重荷を背負うて往くは遠き道
四六時中憑き纏う　輪郭のない不安
影法師のように　ひっそりと　息をひそめる

こんな日常続くなら
迷わずポチッとリセットボタン

両親の血に還って三億の競争を勝ち抜くところから

それともボタンを押さずに冷たい地に還る？

蓬田　匡（よもぎだ　まさし）／理学部・海洋自然科学科三年次

選評

第六回琉球大学びぶりお文学賞　選評

山里　勝己

以下、第六回琉球大学びぶりお文学賞小説部門応募作について、簡潔に選評を述べたい。

「レインボー」（上間美香）

ハワイにホームステイしている「僕」の視点からハワイ社会の人間関係を描いた作品。文章に破綻がなく、作品全体のかたちが応募作の中でもっともまとまった作品であった。日常の光景をきちんと描写し、細部を堅実に描いていき、それを積み上げる中でテーマを浮かび上がらそうとしている点を評価したい。奇抜さをねらった手法ではなく、抑制された一人称の語りで「僕」の視点から描かれるハワイのローカルの人間模様は説得力がある。特に、ホームステイ先のアンティー（おばさん）の人物造形は、ダイナミックで魅力的な女性像になっている。

ハワイ社会でよく語られるハオレ（またはハオリ＝白人）とその他の人種の葛藤が表層で語られる中で、じつはハオリの年老いた女性とホームステイ先のコバヤシさんとの間には、表層の葛藤を越えた人間同士の交流があるということを語り手は発見する。語り手は、アンティーが描いている絵画のひとつが白人女性の家の壁に掛かっていたという事実からこのことを理解するのである。その絵には、空にかかる「レインボー」が海と山を繋いでいる様子が描かれている。虹はさまざまな人種や民族が住むハワイ社会の融和の象徴であるが、それが絵に描かれ、そして白人女性の自宅の壁に掛かっているところに、表面を掘り下げてみると見

えてくる人間関係の深みを「僕」は理解するのである。
この作品にひとつ注文があるとすれば、それはやはりタイトルにもなっている「レインボー」の扱いである。このシンボルをもうすこし力を入れて書いていたら、エンディングがより深い象徴的な次元を獲得し、作品がさらなる高みに到達していただろうと感じる。ここは今後の研鑽に期待したい。

「マットの泉」（東恩納るり）

自殺した友人の自殺の原因を、レシートに書かれた謎めいた言葉から理解しようとする「私」の語りは詩的で、文章も上質だ。全体がファンタジーの様相を帯びて、読者を惹きつける力を有する作品。このような才能を評価したい。
しかし、小説として、全体のバランスが取れているかというと、これは別の話になる。友人の自殺の原因や、海との不思議な交感、彼女の謎めいた言葉などが、それぞれ叙情味を帯びた言葉で綴られていくが、小説としての完成度から言えば、なにかが物足りない。それは、読者の興味や関心を引くような言葉が重なっていきながら、ついにはその興味や関心に完全に応えないで終わってしまうところからきているような気がする。詩であればこのような手法でもいいだろうが、小説の読者はもっと具体的で詳細なディテールや説明を要求する。
可能性のある書き手だと思う。小説の基本、原点を再度確認して挑戦を続けてほしい。

「歪んだかざぐるま」（知念紘己）

交通事故で大けがをした私（漆原）の視点から語られる物語。私、疫病神の相模、友人の本田、そして加害者を絡む物語は、「疫病神」の登場もあって、最初はファンタジーかと思わせるが、疫病神が加害者の見舞

いをアレンジし、自らは消えていくあたりから、人生の意味を問う物語へと変わっていく。被害者の左足をバットで殴りつけることで、「私」は回復すると疫病神に言われ、病室に訪ねてきた加害者に殴りかかるがそれは失敗する。しかし、この後で、「私」は、人生は風車のようだ、幸福と不幸がぐるぐるとまわっている、その繰り返しではないかということを悟る。疫病神と一緒に作った「かざぐるま」は「歪んでいるが」それでも風が吹くとまわる、「とりあえず、あるけるようになろうか」という声にこたえるように。「歪んだかざぐるま」のシンボリズムは最後の十七頁目で明快に表現されていて、作者の表現したいことがよく伝わってきた。この終わり方が佳作として評価されたと思う。

問題は、そこに到達するまでのプロセスだろう。率直に言えば、文章が平板で、読み進むのに難儀だなという感覚が伴う。いま、この作者に必要なのは、読ませる文章を磨くことだろう――作品の構成は基本的に安定しているのだから。さらなる研鑽を期待したい。

「あつい水」(植竹亜紀子)

明晰な文体、安定した作品構成、くっきりとした人物描写、リズム感のある会話――。これがこの作品の上質な部分だと思う。それが、なぜ受賞や佳作にならないかというと、テーマが深まっているかどうか、描かれる人間関係の切実さが真にせまっているかどうか、文章に独創性があるかどうか、などが問われているからである。なぜ、「私」は東京から沖縄まで来たのか、それを切実な背景として物語は展開されているか、結婚を控えた「私」と台湾出身の「タマ」の関係の意味がいまひとつ深まりをみせないのは、作者がほんとうに書きたいことを書き切れていない/書いていないからではないのかという印象が残る。

「ヴィーダーゼーエンへようこそ」(矢口歩)

この作品の最後の文章、「ここは『ヴィーダーゼーエン』。ドイツ語で『再会』を意味するこの店で、今日はどんな物語が交差するのか―」が、この作品の構成とプロットを簡潔に語っている。このカフェではさまざまな人間模様が観察される―夫婦の別離、切ない母と娘の別れ、迷い子になった幼児と母親の再会があり、可能性を秘めながらいまだ青春の苦悩の中でもがいている者たちがいる。作者の意図は作品にしっかりと具現化されている。ただ、この作品で描かれているさまざま小さなエピソードが深いレベルで、つまり読者の感動を読むレベルで書かれているかと問われると、率直に言えば、エピソードのひとつひとつは表層にとどまったままだと答えるしかない。文章は明晰であり、会話もリズム感があり軽快だ。作品の主題をより深く掘り下げていくことが必要であろう。

「クレオロイド殺し」（平良尚子）

一種の推理小説だが、この作品がそれだけにとどまらない重さを持っているのは、沖縄の文化―それも絶滅寸前の言葉―が絡んでいるからであろう。物語自体は、率直に言ってそんなにおもしろいわけではない。既視感があり、登場人物も（名前からして）作りもののようで新鮮味がない。しかし、事件の直接の引き金になった「祖母」の死と、「近代化とは、安物化してしまうことである」と言った祖母の誇り高さは深く印象に残る。いま、沖縄で（あるいは日本全体で、あるいは世界中で）もっとも切実な問題になっているのは、伝統文化が「近代化」され、「安物化」されることである。ここを深く掘り下げていれば、この作品はより高い評価を得たことだろう。

「夏の夕焼け」（兵頭茂）

タイトルからは夏の物語を想像するが、実際には人間をめぐる高度で抽象的な議論が中心になっている作

品。さて、これを小説と呼ぶべきか、どうか、である。人物描写、事件あるいは出来事、あるいは人間をとりまく自然や環境の描写などが、まずは読者が「小説」から期待する要素であろうが、この作品にはこのような要素は希薄で、思弁に傾斜した描写が大半を占める。このような、メタナラティヴに近い作品もあることはあるのだが、しかしそれでもそのような作品は小説の基本的な要素を十分に描きながら展開されるものだ。まずは、基本的な小説の要素を十分に描き、基本的な小説の構成に従った作品を書いてみたらどうだろうか。筆力のある書き手なので、可能性に期待したい。

「犬とさんぽ」（高安慎吾）

ビーグルと呼ばれる凶悪な犯罪者と彼を追う相葉という「探偵」を中心として繰り広げられる犯罪と犯罪心理の世界。作者は多様な文学作品や哲学書を読んでいるようで、それが作品中にちりばめられて興味深い。文章も明晰だ。しかし、このような作品はすでに数多く書かれていて、その中で既視感から解放された斬新な作品を生み出すのは至難の技だろう。そして、膨大な読書量も必要だろう。まずは基本に戻り、身近な出来事を題材とした作品を書きながら、小説とは何かというところから始めてみてはどうだろうか。

「神と兵隊」（赤崎晟一）

激動する世界と、それに関連する軍事行動や戦闘シーンなどの描写は、この作者がよく資料を整え勉強していることをうかがわせる。文章も引き締まって隙がない。ただ、この作品で描かれる世界情勢や軍事行動や戦闘シーンがこの書き手の独自の体験から生まれたものかと問われると、疑問が残る。既視感に溢れる場面が多いのだ。せっかく、冒頭で那覇らしい描写や沖縄のことらしい軍事的なことに言及しているのだから、遠い世界のことよりも、身近な沖縄の軍事的な事を調べて書くと独創的な作品が生まれるだろう。

「猫と俺と損害賠償」（華井けい）

精神を病むまでに疲れた弁護士志望の大学生と猫の交流、そして母親との葛藤を描いた作品。文章はすっきりとしていて無難であり、いくつか叙情的な場面があり、詩的な才能も感じる。

ところが、この作品が短編として成立しているかというと、そこは疑問が残る。まずは、プロット。葛藤らしい葛藤もなく、自己の内面の苦しみを「詩的に」（つまり、パラグラフではなく、1行ずつに分けられた文章で）書いて行くので、小説らしい具体的な細部や、ていねいにスケッチされた情景が見られない。猫との交流も猫の生態の描写など興味深いが、結局は詩のような書き方が続き、小説に要請される細部の具体的な描写を積み上げてテーマを明確にしていく展開が欠けている。

才能を感じる書き手だ。小説の基本を確認して再度挑戦して欲しい。

「犯罪を犯す前に病院へ行こう」（宮田翔太）

小説は、まずは表現したいテーマがあり、そのテーマを浮き彫りにするためにプロットがある。何らかの葛藤が人間と人間、あるいは人間と自然環境の間に生起し、その葛藤を解決に向けて描いて行く中で、テーマが読者に理解されるようになる。これが小説の基本だろうと思う。この作品は、残念ながら、このような基本を踏まえて書かれているとは言い難い。作者の文章には時々鋭い洞察も含まれているが、これを小説として読むことはむつかしい。多くのすぐれた小説作品を読み、みずから小説の基本を確認し、あらためて書き直して欲しい。

「ＥＲＩＫＯ」（望月いのり）

文章は明晰で、登場人物の会話もリズム感がある。全体としては小説のかたちを成しているが、読者がスムーズについていけないような展開になっているのは、この作品を理解するための情報が断片的にしか与えられてないか、あるいは、作者自身がよく詰めないままに文章を繋いでいることからくるのであろう。たとえば、島崎恵理子の自殺は唐突で、そこに至る伏線というか、事前情報というか、そのようなものが読者に示唆されていれば、もうすこしこの作品はわかりやすくなっただろう。文章が読者に向かって書かれているのではなく、書き手自身に向かって書かれているような印象が残る。そのために、作品全体が曖昧になってしまっている。

「May This Happiness Continue Forever」(紅鴉向日葵)

地方から東京の大学に出て来た修司と高校二年の深雪の淡い恋の物語。高校生の深雪は「好きだった男の子」がいたが、その男子が「重度のＤＶ男」、日々の暴力に耐えかねた深雪は学校の屋上から投身自殺をはかって入院している。風邪で診察をしてもらった修司とそこで知り合い意気投合、最後はお互いの気持ちを確かめ合ってハッピーエンドということになる。

概要を読んでいてもわかると思うが、展開が安易過ぎる。高校生の男女のつき合いの中でＤＶがあり、それに耐えかねて校舎から女子が飛び降りるというのは、いかにも拙速すぎる。そこに至るまでの深い苦悩や、若い人なりの辛さがあるはずだが、そのようなものはいっさい描かれてなく、病院で出会った修司と深雪の幸せな日々の表層が描かれるだけだ。

おそらく、人間はそんなに明るく、なにごともなかったような生き方はできないはずだ。引きずっている傷、トラウマ、地方から東京に来た者の苦しみや悩みなどがもっとしっかりと書かれていたら、すこしは読者を納得させることができたかもしれない。

以上、簡単に選評を述べたが、選評は一読者の作品の一部に関するコメントに過ぎない。それぞれの書き手が、多くの優れた文学作品を読み、世界を凝視する中で自らの言葉を発見し、独創的な作品を書くことを期待したい。

（やまざと　かつのり／法文学部教授）

第六回琉球大学びぶりお文学賞　選評

喜納　育江

今年度の小説部門には十三編の応募があった。初期の頃に比べると個々の作品のレベルの差も均され、粒がそろってきているという印象もあるが、例年のように「結局何が言いたかったのだろう？」と思わずにはいられない作品もやはりあった。

芸術の極意はストーリーテリングにある。文学であれ、絵画であれ、音楽であれ、何であれ、自分が創作する「もの」に何を語らせるか、どう語らせるか、というところに語り部、あるいはストーリーテラーの力量が表出する、というのは今さら言うまでもないだろう。

ストーリーテリングは、「聞き手」の存在なくしては成り立たない、というのは、例えば先住民の作家や詩

人など、口承文学の伝統を背景として物語を書く人たちの間で共有されている認識である。「結局何が言いたかったのだろう?」という読後感を「読者の感性」や「読者の限界」に帰してしまうのは簡単だが、そこにその表現技法の実験をあえて試みなくてはならないほどの芸術的な意図がなければ、それはただひたすら独善的な語りに読者を付き合わせ、ともすれば置いてきぼりにしているということになりはしないか。語り部の独創性を発揮しながらストーリーテリングの本来の目的を成就することは容易ではない。

その意味で、佳作となった「歪んだかざぐるま」のストーリーテリングはひとつの成功例を示していたと思う。事故に遭って身体の歪んでしまった主人公「漆原」とその事故の加害者との「加害者と被害者」の間に、「疫病神」なる人物「相模」を介在させ、人間の「幸」と「不幸」の真実を問うテーマ性に優れた作品である。読者がストーリーの世界に容易に入っていけたのは、この書き手の用意周到なストーリーテリングの所産であり、それを可能にした筆力を高く評価したい。あえて欲を言うなら、「自分も相手も不幸になっては人生が止まる」と諭す看護師「本田」の語りと「人生はかざぐるまのようだ」という「疫病神」の言葉から主人公の導かれるこの小説の「結論」はやや直喩的で、面白みに欠ける感があった。「わかりやすいこと」と「わかりやすすぎること」のラインをどこで引くかというのは難しいと改めて思う。

もうひとつの佳作となった「マットの泉」は、サスペンスの展開で読者を飽きさせないストーリーテリングのスタイルを実現していると同時に、独自のテーマを追求しようとするバランス感覚が、応募作の中で最も優れていたように思われる。主人公は、自殺した親友が残したおびただしい数のレシートの裏に書かれた「短い言葉の群れ」を手がかりに、親友の死の真相を探るうちに、むしろその親友の生の真相が曖昧になっていくことを悟る。「真実」は結局無数の言葉の断片的表象であり、到達できるものではないという点など、紙幅の制限も影響してか、抽象的なだけの表現に終わってしまっている描写もあり、もっと長い小説で表現するほうがふさわしい内容だったかもしれない。

受賞作となった「レインボー」は、応募作の中でも「小説」として最も安心して読めた作品と言える。「レインボー」に象徴されるハワイの多民族社会を舞台に、「レインボー・パラダイス」のイメージとは矛盾した人種差別の現実が、安定感のある表現で堅実に語られていく。特に、「人種差別の現実」をありがちな「白人」対「非白人」といった二項対立に閉じ込めることなく、人間のもっと複雑な関わり合いの現実として捉えた展開や、その展開を支える人物像の作り方には、書き手の優れた洞察力が垣間見えた。しかし、一方で、ハワイ社会に精通した読者にとっては、新鮮味に欠けるテーマだったかもしれないとも思う。読者の既視感を裏切るには、経験から得られる直感的洞察力だけでなく、書き手も様々なストーリーの読者になり、未知の世界に自分の知性を晒し続ける必要があるということだろう。

惜しくも選出されなかった作品にも、それぞれの良さがあったことはここで記しておきたい。個人的には、特に「あつい水」の、留学生との文化的・社会的な距離感の中で、動揺しながらも募っていく恋愛感情の描き方に好感を持った。その他の作品にも、読み手の想像を越えた面白い設定や、実験的なストーリー展開など、それぞれの書き手が自分のストーリーテリングを模索している様子が読み取れたが、その試みが成功するか否かの分岐点は、やはり読者にそのストーリーの存在意義を最後に納得させる「落としどころ」が考慮されているか否か、というところなのかもしれない。

（きな　いくえ／国際沖縄研究所教授）

文学が生み出す言葉の力

大城　貞俊

今回の受賞作は「レインボー」（上間美香）に決まった。三人の審査員の意見がすぐに一致するのは珍しいことだ。それほどに他の作品に比して一歩抜きん出ているように思われた。換言すれば、他の作品の印象が弱く、物足りなかったとも言える。

応募作は十三編。作品の中には小説の体裁をなしていないものもあり、レベルは過去に比べて低かった。実験的な作品も多かったが、私には馴染めなかった。実験作なら実験作らしく、その必然性がなければならない、思いつきだけで根拠が曖昧な作品は読むのが苦痛なだけだ。小説を型にはめることは私にも異議があるが、もう少し自分の作品を多角的な視点から眺めてみることも必要かもしれない。

受賞作の「レインボー」は、ハワイにホームステイをした大学生タカの目を通して、その地に生きる人々の姿を描いた作品だ。ホームステイ先は日系のホストファミリー、コバヤシ家。家長のアンティーおばさんのあまりにも野放図な振る舞いにタカは戸惑ってしまうが、やがて大きな愛情に気付く。「レインボー・パラダイス」と呼ばれ「カラフルな人種が仲良く暮らしている」という観光地ハワイの実態も見えてくる。アンティーおばさんとの交流やホームステイの体験を通して、タカは「世の中は、思っているよりも矛盾だらけで複雑だ」と理解するが、そんな中で「あと少し、ここにいるのも、まあ悪くない」とするエンディングは向日的ですがすがしい。抑制の利いた文章も暗示的で成功しており、これぞ文学だという印象を強く受けた。構成力も筆力も、今回の応募作品の中では文句なく最上位の作品である。

佳作は二作品。「マットの泉」（東恩納るり）と、「歪んだかざぐるま」（知念紘己）を選んだ。「マットの泉」は、友人の死の意味を、友人の残したレシートへの走り書きから探していくという作品だ。新鮮な着想はユ

ニークで好感を持った。死の意味の分かりにくさを「マットの泉」と名づけるセンスにも、この作者の文学的資質が秀でていることを感じさせる。またストーリーの中でストーリーが成長していくというような不思議な印象を覚える作品でもあった。しかし、全体としてつじつまを合わせたという印象もぬぐいがたい。意味不明で理解に苦しむ箇所も多かった。ゆっくりと時間をかけて推敲すれば、特異な世界を表出できる期待を抱かせる魅力的な作品であっただけに残念だった

「歪んだかざぐるま」もAランクの作品だ。人生は幸せと不幸が、風車のように回ってやってくるというメッセージを、よく「小説の型」にして定着させたものだと感心した。「人生はきっとそういうものですよ。相手を不幸にして自分が幸せになって。自分が不幸になって、相手を幸せにする。ぐるぐるとこれの繰り返しですよ。お互い不幸なら、人生止まってしまいます」と作者は登場人物に言わせている。微笑ましい認識である。しかし、作者が成長するためには、この地点に自足しないほうがいい。比喩的な言い方をすれば、互いが幸せになってぐるぐる回る風車を作り出すことも文学の力であるような気がするからだ。

他には「ヴィーダーゼーエンへようこそ」や「ＥＲＩＫＯ」が印象深かった。前者は喫茶店を舞台に繰り広げられる優しい人々の織り成す優しい物語で、頁をめくるごとに爽やかな風が吹き渡るようであった。こんな小説があってもいい。これも心を温かくしてくれるロマンなんだと力説したくなるような作品である。欠点の一つを上げればドラマの平板さと既視感にある。このことは、どの作者にとっても難しい課題の一つであろう。「ＥＲＩＫＯ」は、「私」の前から花火のように消えてしまったＥＲＩＫＯを扱ったものだ。文章には力がある。しかし死を扱うには、もう少し慎重にならねばならない。人間の内部を観る目を鍛え、死を観念で弄ばないことが大切だろう。

次回のためにも、応募作品全体から受ける欠点をいくつか挙げておく。まず一つ目に、表記や表現ミスが多いこと。推敲を繰り返せば防げる単純なミスもある。二つ目に、リアリティのなさが目立つ。小説は虚構

であるが上手に嘘をつかねばならない。最初から嘘だと分かる作品を読むのは退屈だ。三つ目は、人間一人を殺すには大変な労力がいるということを自覚して欲しい。その必然性や理由が弱い。四つ目に、人物の造形に破綻が多い。このキャラクターは、こんな言葉を使わないのではないかという印象を何度も持った。五つ目に、独尊的にならないこと。作品を書いている自分を客観視できるもう一人の自分を作り出すことだ。これらの欠点を克服するには、やはり、書き続けること、読み続けることが大切だろう。そんな情熱が突破口の一つになるはずだ。学生諸君の一層の奮起を期待したい。

（おおしろ　さだとし／教育学部教授）

選評【詩部門】

言葉の持つ力

大城　貞俊

言葉というものは、つくづく不思議なものだと思う。嘘をつくことも出来るし、自分を奮い立たせることも出来る。感動を生み出すことも出来るし、涙を流させることも出来る。言葉の不思議さを考えると人間の不思議さに突き当たるような気がする。あるいはそんな発見が詩の言葉になるのかもしれない。

今回の詩の応募総数は三十編。その中から、選考委員で慎重に論議を重ねた結果、受賞作には「プロテウス」（東恩納るり）、佳作には「雨」（長島瑠）、「かいわ」（こはぐら）、「チニカエレヨ」（蓬田匡）、「ティクターリクの夢」（添田晴日）の四編を選んだ。

受賞作の「プロテウス」は、想像力を喚起し、たくさんの物語を呼び起こす言葉の力に優れている。題名の「プロテウス」には「海の神」という意味もあるようだが、そんなギリシャ神話を素地にして、「海の中の洞窟で／あなたと一緒に退行進化してみたい」というフレーズで始まる詩は魅力的である。携帯や、カードなどという文明の利器を全て捨て去って、海の中で素朴に生きることによって、大切なものが見えてくるのではないかという着想も面白い。見えてくるものとして、詩の中の言葉を使えば、「生きることと同じぐらい死ぬことが大切だってこと」、「まぶたの裏にいる宇宙が大きいものだと気づくこと」、「青い空に代表される自然が美しいということに気づくこと」などだ。そんな周りのものを全て愛して、あなたと、そこに眠りたいという詩である。

この詩の優れた特質は、海の中という虚構の空間や時間を使って恋の歌を作り上げたことだろう。また、「ゆらゆら退行進化したい」という、「ゆらゆら」という擬態語が実に効果的に使用されている。言葉にリズムがある。つまりは言葉の感覚が鋭いということだ。また「退行進化」という言葉も魅力的で、「進化の最先端まで巻き戻ってあなたとそこで眠りたい」という謎のような言葉で詩は終わる。「進化の最先端」とはどこだろう。例えば冷凍保存までして、海の中で永遠の命をあなたと一緒に獲得しようとしているのだろうか、などなど次々と物語が溢れてくる。詩の言葉が想像力を喚起し、物事を見る視点を新しく付け加える力があるとすれば、この詩は他の作品よりも一歩抜きん出ているように思われる。

佳作の他の作品も、充分に刺激的で、それぞれの長所を持っている。「雨」の詩は、今回の応募作の中でも、私が大好きな詩の一つだ。「知ってる？　声ってかさの下が一番美しく聞こえるのよ、だから私、雨の日しか

声を出さないの。だってあの人には私の一番美しい、一番綺麗な声を聞いてほしいんだもの」と始まる詩だが、ここには発見がある。同時にあの人に対する健気さがある。素直さがある。キュートで可愛い詩だ。もちろん、受賞作もそうだが、詩の世界は虚構の世界であっても構わない。希望の世界であっても構わないのだ。

「かいわ」は、海の貝から、お嬢さんに語り掛ける構造を持った詩で、風刺的な精神が弾けている。掛詞や語呂合わせなどの遊び心もある愉快な詩だ。「チニカエレヨ」は、自明なことを無化する挑戦的な言葉が溢れている。シュールな表現、擬態語の冴え、いずれも新鮮である。「ティクターリクの夢」は、「生きとし生けるものはみな夢を見る」として、永遠の夢、永遠の命、そこへ到る普遍的なるものの開拓、自らを見つめる目の厳しさ、寂しさを感じさせられた。

他の作品、例えば「かつてわたしがおさなかったころ」の作者の言葉を弄ばずに世界を凝視しようとする姿勢、また「秋の夜長の皮算用」には新鮮な発想や面白い擬声語が作られており共感を覚えた。

ところで、私たちの日々は、言葉に裏切られることが多い。詩は、私たちを裏切る言葉を紡いで作るのだから厄介だ。言葉に裏切られないためにはどうすればよいか。言葉の意味をずらし揺らし吟味し手なづけなければならない。難しいことだが、なかなかに楽しい行為でもある。言葉の中に真実があるのか。言葉の向こう側に、真実があるのか。詩の言葉を吟味することは、きっと私たちを豊かにしてくれる。学生時代にそんな言葉と向き合い、格闘することは、人間の根源的な姿を発見することにも繋がるはずだ。

（おおしろ　さだとし／教育学部教授）

第六回琉球大学びぶりお文学賞詩部門　選評

松原　敏夫

びぶりお文学賞の詩部門は今回で二回目。詩は言葉の表現力をもっとも求められるジャンルである。それだけに言葉を自由に駆使して、もっているものをいかに表出してくるか、その言語芸術の面白さにであえるのが、審査の楽しみでもある。

今回応募した作品数は決して多いという数ではない。しかし、それぞれある対象を詩にしようとする意欲があり今後の可能性を感じさせる作品が多々あったことは言っておかなければならない。詩を自覚的に書いていこうとするなら詩の本を読むことも必要だ。日本の詩、外国の詩、沖縄の詩を読んで刺激を受けて、自分自身の詩の書き方を構築することを心がけて欲しい。大賞となる受賞作は「プロテウス」。二人の選考委員がともに推挙した。

毎回感じるが、詩編の長さが短いものが多すぎる。評価をするのにある程度の長さは欲しい。応募規定で指定している枚数、行数に近い長さは出して欲しい。

（受賞作）

『プロテウス』（東恩納るり）

この作品はもっとも詩的な味があった。言葉が自在に働き、イメージや感性を取り込んでいることに感心した。海の底で合一しようとする誘いの世界がネタだが、作者の人生観のようなものもしっかりはいっている。「退行進化」は意味的だ。現代文明の進化物を捨てることで「生きるのに大切なもの」「まぶたのうらにいる宇宙」の対置と発見をしている。言葉の輪郭がはっきりしているところがいい。リズムもある。

（佳作）

『かいわ』（こはぐら）

ことば遊びが面白い。かいわは「会話」であり「貝話」であり、「カイ」「回」「怪」など、「かい」の音韻がちりばめられ不思議な感じがでている。貝をたべる日常を異化の眼でみている。貝を擬人化して自在なイメージと言葉を出している。表現にちょいと凝ったところも好感がもてた。

『ティクターリクの夢』（添田晴日）

とおい時空の彼方へ生物学的な想像を走らせ、はるかな夢をつくっている。読者をそのはるかな時空へと立たせてくれる。生物の固有名詞を多用している。ティクターリクとは3億7500万年前の魚類生物らしい。さらりと書いてしまったとしても専門的であるので、注記が欲しかった。その生物の輪郭の取りだしと喚起するイメージを作品のなかで展開すれば、もっと面白い作品になったと思う。

『雨』（長島瑠）

小品だが、詩的な雰囲気を捉え出している。「私の一番美しい一番綺麗な声」とはなかなか言えない。それをさらりとだしてきた。「傘の下が一番美しく聞こえるのよ」とは読者に喚起させるものがあって、雨と傘への感覚がたのしくなった。

『チニカエレヨ』（蓬田匡）

この応募作の原稿の書き方は不親切だった。横書きのような印刷なのでそうかと思ったら縦書きだった。

字面で読者に苦労させるのはよくない。気をつけて欲しい。この時代での、やりきれない人生の、諧謔、ペーソス、シニカル、ネガティブ、挫折感といったものが、打ち出されている。ときおり挿入される擬態語が故意でありながら効果的である。外界と接する自己のなかで世界をみているところは若者の現実として読める。世の中に対する反語的精神の姿の表出がある。世界の不条理への切り込みみたいなものを感じた。

（まつばら　としお／外部選考委員・山之口貘賞受賞詩人）

第六回琉球大学びぶりお文学賞　選考経過

第六回琉球大学びぶりお文学賞は、平成二十四年五月一日から十月三十一日までの間募集し、小説部門は十三編、詩部門は三十編の応募があった。学部ごとの内訳は次のとおり。

【小説部門】法文学部＝八編、観光産業科学部＝一編、理学部＝二編、工学部＝一編、人文社会科学研究科＝一編。

【詩部門】法文学部＝五編、観光産業科学部＝一編、教育学部＝三編、理学部＝四編、工学部＝三編、人文社会科学研究科＝六編、教育学研究科＝五編、理工学研究科＝三編。

また、学年ごとの内訳は次のとおりであった。

【小説部門】一年次＝一編、二年次＝三編、三年次＝一編、四年次＝七編、院生＝一編。

【詩部門】一年次＝二編、三年次＝五編、四年次＝九編、院生＝一四編。

小説部門に関しては、本来ならば附属図書館職員による一次選考が行われるが、応募数が十三編と少なかったため、全ての応募作品に対し三名の選考委員（山里勝己氏、喜納育江氏、大城貞俊氏）による選考を行った。詩部門も特に一次選考無しの形で二名の選考委員（大城貞俊氏、松原敏夫氏）による選考を行った。

選考会議は、それぞれ十二月三日、十二月七日に行い、既発表のとおり、受賞作と佳作を選出した。これらの作品を含め、応募作についての選評は、前出の選考委員による選評を読んでほしい。

平成十九年に創設された本文学賞も第六回を数え、来年度からは応募資格を本学の学生と限定せず、沖縄県内の大学・大学院大学・高等専門学校等の学生へ拡大して実施する予定としている。この文学賞が、沖縄に在する若者の内なる言語力、表現力、創造力を刺激し、文学・文化活動の活性化の一助となることを期待したい。

（照屋ひとみ・附属図書館職員）

第6回
琉球大学びぶりお文学賞

応募締切　平成24年10月31日（必着）
発表　平成24年12月上旬（予定）

【小説部門】
・受賞作1編 ＝ 海外旅行（20万円以内）またはノート型パソコン（同額）
・佳作3編 ＝1編につき図書カード 5万円分
※海外旅行を選択した受賞者には研修内容を、「海外見聞記」として書くことを義務づける。

【詩部門】
・受賞作1編 ＝図書カード 5万円分
・佳作2編 ＝1編につき図書カード 1万円分

選考委員
小説部門／山里勝己（法文学部教授）、喜納育江（国際沖縄研究所教授）、大城貞俊（教育学部准教授）
詩部門／大城貞俊（教育学部准教授）、松原敏夫（山之口貘賞受賞詩人）

応募要領
● 小説及び詩の2部門とする。
● 日本語で書かれた作品とする。

両部門応募してもOK!

● 応募資格
本学に在学する学部学生及び大学院生。

● 応募方法
・小説部門に関しては、一編400字詰め原稿用紙50枚以内、1人1編とする。ただし詩部門と小説部門の重複応募は認める。
・詩部門に関しては、一編400字詰め原稿用紙5枚以内、1人3編までの応募とする。
・応募原稿は未発表作品に限る。（同人誌などにすでに発表したものは選考の対象外とする。）
・小説・詩両部門とも、原稿は、A4判横長用紙にタテ書き、1ページ30字×40行、10ポイントの文字で印字する。
・必ず通し番号（ページ番号）を入れて右肩を綴じる。
・必ず1枚目にタイトル、氏名を明記する。ペンネームも可。
・原稿の末尾に、住所、電話番号、メールアドレス、氏名（本名）、学部・学科（大学院の場合は研究科）、学年を付記する。ホームページの投稿用フォームをダウンロードして貼り付ける形でも構わない。（個人情報は応募に関する連絡以外には使用しない）
・応募手段は、直接持参、郵送、Eメールでの送付（メール添付での応募の場合、PDF形式とする）のみ受け付ける。
・応募原稿は返却しない。

●送付先および問い合わせ　琉球大学附属図書館情報サービス企画係
電話 098-895-8167　mail：kikaku@lib.u-ryukyu.ac.jp

第六回琉球大学びぶりお文学賞作品集

発行日　二〇一三年三月十八日
編　集　琉球大学附属図書館
発　行　国立大学法人琉球大学
〒九〇三―〇二一四
沖縄県中頭郡西原町字千原一番地
印　刷　合資会社　精印堂印刷